

昭和9年(1934年)設立

公益社団法人 昭和経済会

# 昭和経済

Manager Association of Japan

80周年記念  
第66巻3号  
27年3月号

国会図書館永久保存書

新年の内外経済を展望する

五十嵐 敬喜

戦後70年 10年の「輪切り」で政治再考

御厨 貴

歴史全体を俯瞰する意義

山内 昌之

憲法改正への道

北岡 伸一



大山新景

人間社会は今日まで幾多の歴史的試練を経て、その存続を得てきました。

その間、私達は経済社会の生活の中で、自然科学への洞察は驚きを以て、文化科学への触発は閃きを以て発展に寄与してきました。科学技術の進歩と開発は人間の英知を以てこれに臨み、文化科学の啓発と振興は人間の情操を以て限りなく高めてゆかねばなりません。

歴史のいかなる発展過程においても、常に人間の尊厳をうたいあげ、自由と平和が約束される豊かな人間社会の存続が、私達の目的であり実践であります。

昭和経済会は、伝統を重んじ、時代の変化に機敏に対処しつつ、この普遍的な理念のもとに、日常の企業経営と経済活動を通して、さらに公私経済の発展と推進に役立つ啓発、協力、親睦の団体として、その使命を果たしてまいります。

公益社団法人 昭和経済会

## 公益社団法人 昭和経済会の案内

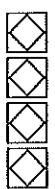
(元財務省大臣官房所管)

### 創立と趣旨

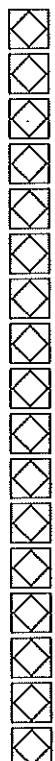
会員制の企業家、経営者団体で我が国の「公私経済の発展助長と会員相互の連絡並びに親睦を図る」目的で、一九三四年(昭和九年)五月十五日創立され昭和十四年、大蔵省から社団法人の許可を受けました。

### 主な活動

- ① 会員相互の啓発、親睦、協力
- ② 内外の経済、政治、文化、学術の定期講演会
- ③ 政府、関係省庁への要望と提言
- ④ 専門委員の法律、税務、経営相談
- ⑤ 海外派遣留学生奨学基金の活用
- ⑥ 月刊「昭和経済」の発行



## 三月号・目次



卷頭言 ..... 佐々木誠吾 (2)

対中國、けん制・説得の両面で  
歴史認識は対話継続を ..... 川島 真 (76)

新年の内外経済を展望する ..... 五十嵐敬喜 (40)

ニッポンの革新力 ..... (82)

戦後七十年  
十年の「輪切り」で政治再考

御厨 貴 (55)

「被ばくピアノ①」 ..... ランコ岩本 (91)

歴史全体を俯瞰する意義 ..... 山内 昌之 (60)

昭経俳壇 ..... (96)

憲法改正への道 ..... 北岡 伸一 (65)

後記隨想 ..... 佐々木誠吾 (100)

表紙の言葉 ..... 佐々木誠吾 (124)

消費増税延期と財政

二〇二〇年度『黒字化』を目指す

伊藤 元重 (70)

特別賛助会員

(125)

## 卷頭言

佐々木誠吾

### 高値更新中の東京株式市場と ニューヨーク株式

昨日のニューヨーク株式が市場高値を再び更新して一五四ドル六七セント高くなつて、一万八一四〇ドル四四セントで取引を終えた。財政破綻に追い込まれて二月末の期限切れの債務償還を前に、EUが開いたユーロ圏財務相会議でギリシャの支援策を四か月延長することを決定したからである。これでギリシャの財政破綻は一応回避できたが、その間ギリシャはEUや、欧州中央銀行からの金融支援を持続的に可能な緊縮財政政策の内容と規模を準備しなければならず、ギリシャの努力が期待される。ギリシャの借金は日本円にして三五兆円に達している。

若者たちの失業率が五〇パーセント以上にも達しているといわれるギリシャである。こ

れ以上の緊縮財政を求めて国内景気をさらに悪化すれば、国民の不満を高めるだけである。さりとてこのまま野放図に放置したら、ギリシャ政府はどのような対案を持つてくるか、それによつては再びギリシャ発金融危機が世界のマーケットに影響を及ぼさないとも限らない。さらにEUやIMFなどから借りているユーロについても支援中止とか、受け入れられない対案を持つていつたりしても、ギリシャの景気は悪化して取り返しが付かない構図になつていい。前門の虎、後門の狼と云つた具合で、そのかじ取りは難しい。基本的には構造改革を断行しない限り、先の望みはない。公務員の給料をカットし歳出削減に立ち、規制を緩和して民間企業の優遇策を以て活性化を図り雇用の確保を目指すべきである。同時に外国資本を入りやすくするため、思い切つた構造改革が必要である。

ギリシャは先の議会選挙で政権が交代した。

新政権は緊縮政策の中止と、対外債務の返済条件の緩和を掲げてきている。しかし金を出している方としては胆略に受け入れることはできない。ギリシャにもそれなりの痛みを伴つた自助努力は必要と云うわけである。ギリシャ政権与党でも、自国の銀行部門の崩壊や、EUやユーロ圏からの離脱は考えていない。またEUにしてもその逆もあって思惑が交錯している。ギリシャにても若者を中心に、EUから離脱して自力で立て直しを図れると

は夢にも思っていない。彼らは賢明で現実的である。むしろ選挙を終えた今、矛先は新政権の手の打ち方に厳しい目を向けてきて居るはずである。ノーテンキの日本議会と、若者たちとは、現実をとらえてみると心配な差が出てくる。

国債の超発行残高で、名高い日本である。平然としているが、今の安倍ノミクスを達成するまで何でもありの金融政策で、景気底上

げを狙っているものの、幸い追い風となつた円安と、欧米の好景気に輸出産業の順風満帆で業績は向上してきている。トヨタは二兆七〇〇億の利益を上げる具合である。貨上げの労使交渉もうまくいくて満額回答続出で、やがてこれが消費に回って、さらに企業の設備投資へと廻つて好循環である。片や企業、家計からの税収増しにつながつていけば財政再建と、基礎的財政收支の黒字を目指していくことになる。

地方企業の再生には時間がかかるが、これには地方活性化の政治課題がある。規制緩和を推し進めて金を有効にだし、全国隅々までに景気上昇の実感を味わえるようにすることがアベノミクスの肝心である。しかしそのための金融の垂れ流しもいつまで際限なく、制限なくやっているわけにはいかない。先の財政諮問会議ではオフレコと称して黒田日銀総裁が举手の上、5分以上にわたって「日本

の国債の格付けについて、国債信用の暴落する可能性について論究した」そうである。民間の格付け会社の言うことだからと云つて放置するわけにもいくまい。国債の暴落を、世界の投資家がいつ狙つて仕掛けてくるかわからぬが、目下はその危険性は低いとしても、心して対応していく必要がある。いくら民間の格付け会社だからと云つて、これを軽く扱うこと�이出來まい。結果警戒し始めた外国投資家はもちろん動きだし、足元から日本の銀行が買つてある国債手放すようになつたら大変である。ないとは言えないということを黒田総裁はいみじく忠告したのであらう。だから財政再建もしつかりとやつて下さいよ、と云いたかつたに違ひない。さもありなんである。

会員の方々からいろいろなことについて相談を受けたりして、事務局は私心中に適切な

対応に努めてきて居るつもりである。なかなか神経を使う仕事もある。同時に勉強になつて充実感を味わうことも出来る。中にはもつと早く相談しに来てくればよかつたのにと思うこともあつてすべてが満足と云うわけがないにしてもおおむね感謝されている。

先日ある資産を持つた会員が余談的に、今アメリカの投資信託を大手証券会社から進められているがどうだらうかと云う話を仕掛けられた。昨年十月初めごろである。経済の見通しを話し合い、納得して帰つたその人はためらうことなくその外国投信を購入した。配当付き株式を多く組み入れた投資信託らしい。一昨日見えて結果を報告するところによると株式配当金が約五パーセント入つて、値上がりが一七パーセントに及んで好調だという。

四ヶ月でその率だと年換算すれば六〇%の利益になつてしまふではないかと、いささかびっくりした。取れる時にはとつておかないと、

いつまた逆に行くかわからないが、日本の場合を想定してオリンピックの2年前までかなと語り合つた。

日本の日経平均株価もここにきて連日高値更新を続けている。リーマンショック以来の一八年ぶりの高値をようやくつけたのである。

過去にはバブル時代だが、三万八九三五円の史上最高値からすると、まだ半分にも戻つてない。その時のニューヨークダウは、二八〇〇ドルあたりであった。なんと今の六分の一である。ニューヨークの株価はあれから六倍になつてゐるが、日本の日経平均は2分の一にもなつていらない。すさまじい経済指標の落差である。アメリカ経済の堅実な実力を反映している指標であることがわかる。数字的に見て、だからと云つて別に日本の経済政策の成否が世界を動かす、なんて言う妄想は持つていらないが、足元の好調がなんといつても重要である。果たして日経平均が2万円行く

かどうかだが、株価が上がつて文句をつける人はいない。生活必需品が上がつたり、土地がバブルで上がつたりすると困るが、そうでなければ、インフレ率では二パーセント位、物価の上がることも成長にとっては必要なことである。正誤のほどは分からぬが、ひところ株式資本主義と云う言葉が流れたが、全員参加型資本主義の総称として結構なことである。ましてや株価などは、景気よく上がるこことによつて社会がウハウハになるなら、沈んでしまうよりましである。ただ過ぎたるは及ばざる如しで、行き過ぎると反動もあるから気を付けなければならない。贅沢を云つたらきりがないが、勞せずして儲かるというのも、持たざる人のやつかみであつて、そこはうまく政治が政策的に平均値を以てならしていけばいいことである。

株価にしても動きは思惑だから、実体経済と乖離して動くこともある。最近のアベノミ

クスに批判的なエコノミストの五十嵐さんが本欄の「講演記録」で云つてゐるよう、經濟は魔物である、いつ期待に反して回転始めるかわからない、と批判的な意見もあることを忘れてはいけない。そこで、あの時は有資源国として人気があつて好調だつたオーストラリアについて、今を検証してみたい。

今、豪ドルが下落している。石油の急落で資源を持つ豪の為替が対円で買いややすくなつてきているし、株価も下がつてゐるので、原油価格が落ち着いてくれば、この辺りが面白いかなと云うことを暗示的に言つた。友人は説明に合理性があつたので購入を決めようとしている。合理性があるからと云つて經濟の思惑が当たるとは限らない。合理性が通じないこともある。人の行く裏に道あり花の山、とか、木の葉が沈んで小石が流れるといったことも相場の世界にありがちなことである。株式相場は思惑で動くからであり、よく言え

ば株価の先見性と云う言葉に置き換えられてゐる。それにしても昨年の十月初めに買った外国投信が、そんな素晴らしい結果をもたらしていることを聞いて、小生もあの時買っておけばよかつたなあと述懐していたのである。

二月一九日

## 爆発的スマホの普及

NHKのクローズアップ現代が、爆発的に普及するスマートホン時代を取り上げて、現代の若者が本を読まなくなつたことを論じていた。読書も時代の流行に晒されやすいが、今のような作家の小説などが読まれなくなつたことについて論じた方が早いのではないかと思つたのである。スマホの普及はそれなりにあつてしかるべきだが、あくまで便利性の問題であつて、辞書が手近かにある程度にしか思つていらない私には、全然関係のないものと映つている。あの小さなボックスにあらゆる知識の情報が組み入れられていること自体脅威だが、それはそれにかじりついていかほどの知識の集積が自分の大脳に収められるかと云つたら、大した容量しかないと気づいて、むし

ろ唾然として自信喪失につながつてしまふだろう。

子供たちや孫たちは、結構器用にフル回転で利用しているようだが、わたしはそのようなせわしさが、彼らにいかほどの被害をもたらしていくだろうかと、むしろその方が気がかりである。立花さんをとやかく言うつもりはないが、読書をする人の激減がテーマで、その原因が簡単なスマートホンのような機器の普及にあるのではないのかとの危惧について、逆にスマートホンの便利性と有効性を強調して、何だか話が違つた方向へ行つてしまつては、課題の話が進まない。あの人は独善、独断の評論家の一面を持つてゐるから致し方ないが、もう古いタイプの人間になつてゐるのだろう。その幻影を追つてゐるようではNHKもありあてにならない。それに類似した人は

この頃いくらでもごろごろしている。はつきり言つて、物知り博士になるなら、ああした機器を駆使して、頭の容量可能な限り知識を蓄積すればいいのだが、問題はその判断力、応用力ではないだろうか。知識をうのみにしていたら、間違つた知識だつてあるのだから、嘘まで鵜呑みしないとも限らない。私の高校時代にドイツ語の教授が言つた言葉がある。辞書を信用しないようにしなさい。そうした態度で辞書をめぐりなさいと。読書だから全ていいとは限らない、読む本の質を問い合わせながら読まないと、下らないことに時間を費やすことになつてしまつ。だつたら寝ていた方が良いとまで言わないうが、要は読まない方が良いということである。

友達の多くに読書好きが沢山いた。ものすごく読書に時間を割いていたが、余り冴えない人物になつてしまつた。さえているのか、冴えないでいるかは判定が難しいが、とにかく、パッとしない。そのうち躁とうつを繰り返す病にかかるてしまい、朝早く誰構わず友達に電話をかけてくるようになつた。本人は真剣に問題意識を以てかけてくるのだが、朝早く電話に起こされるのも困つたものである。相手にされなくなつてしまつた本人は、やがて鬱になつて沈み込んだままである。本人が満足しているからいいようなものの、他人の存在をあまり気にしない存在になつてもどうかと思う。

知識の集積を図る努力は必要であるが、それだけで満足しきつては読書も毒になりかねない。読書の一一番大切なことは、一方で批判精神を涵養していくことにある。脳神経化の先生は、読書とスマホの相違を大脳の構造と機能を解説して説明していたが、余り納得いくものでなかつた。ましてやスピードを持ったスマホのように、神経を使

うほどには、肝心の大脳を刺激して独自の判断を促す領域まで行かないのではないかと思う。さらには思考力と想像力に及んできて、その方はさっぱり駄目だったということになりかねない。コンピューターのようにもすごい容量の蓄積はあっても、それは人間の持つ領域ではなくて、そもそもの意義は違っている。本を読むことと、スマートホンを見るとはどちらも勉学する意味では一緒だが、意味合いの深さが違うかもしれない。昔おやじによく言われたことがある。映画を見てばかりいる奴は不良だとよく叱られたものである。さりとて勉強しろというわけではない。もっと自分で好奇心を持てるような対象を、自分で探して来いということである。つまりものを見て考えて良し悪しを判断し、なんでもいいから真理となるようなものを探して来いということであつた。そのうち広い世界から

自分の道なり、世界なりを見つける努力をするかもしれないという期待でもあつたのだろう。金がかからないから無責任に言ったとも思えない。

#### 自民党の大勝

十二月十四日に行われた衆議院の総選挙の結果は、予想通りの自公連立政権の続投を大勝の選挙結果を以て国民の審判が下つた。一般的に言つても経済政策の積極的な運営にノーを下す人は少なからう。投票の結果を待つまでもなく、国民の審判は半ば決まっていったようなもので、ここは安倍さんの鋭い勘が働いて、解散に勝機をつかむ目算が当たつたといえる。国民はなんといつても経済優先の気持ちが強いから、それを以てする限り、野党の諸君に勝ち目はない

いことは最初から歴然としていた。だから投票率も低く、選挙に熱気がないのも、無風状態での自民圧勝の結果となつた。あの民主党のだらしない政権担当時を思い出すのも、うんざりの国民の心情だから、自民圧勝と分かっていても独走されても困る。ワイワイなことに今の安倍さんにはそうした危険な思想はうかがえないところが、国民の信任を得ていて証拠ではないだろうか。

事実、麻生さんのような変な感覚を持つた議員も中にはいるので、油断できないが、それにチエック機能を果たしてもらいたいのが、平和主義の公明党の諸君である。野党の諸君が純粹に政治的に公明党的思想、信念に触れて、参加してもらいたいと願う心境である。

民主党のだらしなさは相変わらずであった。その象徴的なものとして、民主党の党首の海江田さんである。選挙区でも落選し、

比例でも入らなかつた。一生懸命に頑張つていたが、国民の気持ちをつかみきれなかつた。むしろここで民主党が自民党に対峙した政党として成長してもらいたいのだが、勉強不足、未熟さをさらけ出して、国民の厳しい目をかわすことができなかつた。離合集散の後始末をして選挙に臨んだに等しい日本維新にいたつては、釈然としない雰囲気があつて、政党として推举するには、政策の乱れ、内紛に明け暮れるようなものがあつて賛同しかねない。今の内外の状況を以てしては、このまま自公連立政権を以て強力に経済、財政の改革推進に心したいし、だとすれば自公民に引き続き期待をよせるしかあるまい。今回の選挙は安倍さんの作戦勝ちであつた。安倍さんは人間的にも安定感が備わつてきており、今の時期、時代にふさわしい一面を以て、国民の魅力の一つになつてゐることは確かである。こ

の先右顧左眄することなく、信託を寄せた国民の信にこたえて、さらなる経済優先、景気回復優先、デフレ脱却優先で進んで行つてもらいたい。経済が安定し民政の安寧

につながれば、おのずと他のすべての道は開かれ、対外的にも優位な立場に立つて、日本の政策を内外に広めていくことができるはずである。基本は、平和主義自由主義

を貫いていくことに尽きる。

私は、そんな意味を込めて貴重な一票を行使した。最近は内外ともに激しい動きを呈して、問題山積の様そうである。ただ、大勢としては自由主義経済社会が、幾多の試練を乗り越えて発展的過程に入ってきていることは好ましいことである。世界がいたずらに混乱することなく、秩序を守り、切磋琢磨の道を進んでいくことは、世界を大観するときも、個人に立ち返ってみるとさも同じ理屈ではないだろうか。いろいろ

と不服はあつたにしても相対的に選挙の結果を安堵して、明日への勤労の道を安心して進んでいける気がしてくるのである。

十二月十五日

#### アメリカとキューバ改善の朗報

世界的な朗報と受け止めたい。今日の各社の新聞の夕刊は、アメリカとキューバの関係が正常化に向けて大きく踏み出したという記事である。両国は、一九五九年の革命以来、キューバにカストロを指導者とする過激な共産党国家が樹立されて以来、険悪な関係が続いてきた。アメリカにとつては目と鼻の先に協賛国家が踏ん張っていたことと自体不思議な事例であった。私に鮮明な記憶としてあるのは、一九六二年に発生し

たキューバ危機である。時のケネディ大統領と、片やフルシチヨフ書記長の緊迫した対応であった。キューバに核施設を建設しようと、核兵器を持ち込もうとするソビエト海軍と、これを阻止しようとするアメリカとで一触即発の危機であった。アメリカは海上封鎖に出て、ソビエトをけん制した。

核戦争の可能性に世界が緊張し、震撼を味わった出来事である。核兵器を積んで撤退していくソビエト海軍の軍艦の姿を見て、ほっと胸をなでおろした記憶がある。真っ青な空と、紺碧の海のカブリ海を焦がす閃光が走るところであった。この時のケネディの決断の勇氣に勝るものはない。

それ以来、過激な演説と行動で知られるカストロは、強烈な反米主義を掲げ、今までいえばテロの親分のようであったが、アメリカの経済制裁を受けて民衆は困窮していった。カストロは狂気に近い独裁政治を敷いた。

て、民衆は自由を奪われて、悲劇な状況が長く、無駄に過ぎていったのである。リビアの独裁者カダフィーと、キューバ独裁者のカストロは、ともに狂犬とハイエナの異名をとり、民主主義の強敵存在であった。これらが地球上から一つ一つ消滅していくことは、世界にとつて幸運の兆しである。

世界の各地で紛争の絶えない状況が続いている。そうした中で積年の怨念を払い、新しき友好関係の樹立と、民政の安定に向けて、輝く時代に進もうとする国々もある。アメリカとキューバの間では、今や新しく、良好な国際関係が築かれようとしている。二国間の関係改善と国交回復は、世界にとつても歓迎すべき出来事であり、大いに祝福したい。両国民にとつても世界につても祝福すべき歴史的出来事である。カブリ海に新しく躍動する、大経済圏が生まれることであろう。さらには広く中南米諸

国にとつて、新しい民主主義の台頭をもたらし、経済発展に大きく寄与していくはずである。

これと対照的なのが今のロシアである。ブーチンが仕掛けたウクライナの内紛は、石油資源を以て力強く近隣諸国に、新しい覇権を試みたものだが、その妄想は徐々に矛盾をさらけ出してきているようである。

欧米の経済制裁のボディーブロウがきて、さらには追い打ちをけるように原油の急落で窮地に立たされている。対ドルが三〇ルーブルだった通貨は、今や六〇ルーブルにまで下落しており、一時八〇ルーブルまで値下がりして、ルーブルの価値は散々な目に合っている。足元の経済が低迷し、ブーチン政権が揺らいでいる。

ロシアの隣国で盟友であるベラルーシはここにきて決済通貨を、ルーブルからドルや、ユーロに変えようとしている。ロシア

圏では、こうした傾向は今後も続いていくに違いない。ロシアの石油を武器とした恫喝外交は、今後通用しなくなつてくる。

あつという間に通貨の価値が半分になつてしまふような国との交易は、安心して付き合つておれないだろう。外国企業も引き上げていくだろうし、うかつに投資はできないことになる。ロシアの経済は今後二年間は苦しい経験を経ることだとは、ブーチンが告白しているが、果たして国内がそれに耐えていくことができるか問題である。

ひよつとするとブーチンの足元が揺らいで混乱していくようだと、これも新しい火種となつて別の問題を惹起しかねない不安材料となるかもしれない。そこで重要なことは、日本とアメリカの経済と政治が安定した基盤に立つて、しつかりした足取りで進んでもらわないと、世界経済が新しい展望

のもとで、力強い発展勢力となつていつて  
もらわないとと思うと、責任重大である。

年末、所要があつてオフィスに赴いた。

小雨が降つたりやんだりして、時折り薄日  
が差したりしてはつきりして、はつきりし  
ないお天気だつた。薄日が差して一瞬空の  
一角に晴れ間がのぞいたりして、思わずぶ  
りな空模様である。しかし、夕方から小雨  
が降りだして傘が必要になつた。昼間の時、  
昼食に街中に出たが、行きつけの近くのカ  
フェ・ド・ユ・銀座によつて軽く食事をとる  
つもりで入つたが、結構お客さんで混んで  
いたが、接客のボーアイさんが常連の私を見  
てすぐに案内して窓際の椅子を用意してくれた。通りに突き出した赤いテントが銀座

通りの並木に似合つて、少しばかり華やい  
で見える。クリスマスが近いから、行き交  
う人にも華やぎがうかがえる。昨日吹いた  
寒い風と打つて変わり、今日の霧のような  
小雨は、何となく温かみがこもつていて氣  
持ちがよい。道行く人にもそんな感じがう  
かがえる。最近の外人観光客の増加に対応  
して、銀座の街なかもそうだし、小売店や  
デパートも趣向を凝らして、飾り付けに念  
を入れている。お客様への対応も温かみがあ  
つて、人々の表情にも何かしら選挙のあつ  
た後の落ち着きを喜んで楽しんでいるよう  
である。さて、食事を終えて私は仕事に就  
くためにオフィスに戻らなければならない  
が、中味次第で気分が揺れ動くことは致し  
方ない。調子の変な時には、良い方へ持つ  
ていくことが仕事である。生暖かい雨の小  
さなしづくが、顔に当たつてことのほか気  
持ちいいと感じながら、濡れた歩道を歩い

て行つた。明日は教会でクリスマス礼拝が行われる。穏やかな、良いお天気になつていてほしいと思う。

そして気が付いたら夜の十一時だつた。幸いセブンイレブンで万が一に備え、おにぎりとバナナを買ってきておいたのでそれ

を夕食分として腹に収めたが、時間に気づいてオフィスを出た。八重洲から通りを一つ渡ると銀座界隈である。雰囲気はガラッと変わつて街中はクリスマス気分にあふれている。ネオンが消えずに瞬いでいるし、通行人も相変わらずに多い。昼食をとつたケフェ・デウ・銀座は、普段はお目にかかつたことのないビールが出されて、お客様楽しそうに飲んでいる様子がうかがえた。雨もすっかり上がり気持の良い街中の通りを、若い人たちがクリスマス気分を味わつて楽しそうに群がつてゐる。私もなんだか若やいだ氣分になつて、仕事の疲れも

すつ飛んでしまい、若者の群れの中に交じつて、銀座交差点の地下鉄の入り口まで上機嫌で歩いて行つた。すると家内から携帯電話が入つた。夜の遅いのを心配する電話であつた。  
十二月十九日

明けて二十一日夜、私は約束があつて重要な所要で夜遅くまで酒を付き合つた。肝胆相照らす心境で、互いに素晴らしい会食団欒の席を過ごすことになつた。難しい依頼事でもあつたが、しかし男の一言で、すべてを理解し、自分としては蛮勇を振り絞つて、その意にこたえたいと思つた。六畳ほどの落ち着いた座敷に席を設けたが、付き合いは明朗闊達、明るい光が前途を差して、神に祝福を受けてゐるようを感じた。胃の手術をして退院してまだひと月半である。自分の今までの風采には聊かも後退し

た影はなかつた。一人前に酒を飲み、あるいはもつと盃を開けて、達者な風情で友人と付き合えることができた。友人は感激して私の思いを受け止めてくれた。期待に応えたいという重圧が重くのしかかるが、やるべき仕事はまだ残つてゐる。友人は、次の席に行き付けの銀座白いばらの店に寄つた。半年ぶりである。そこで店長にも会え、ボーカリストたちにも会えて交歓することができた。久しぶりの酒にほろ酔い気分も上々、友人とは互いに十分に飲んで楽しめた。そして酔つた私をハイヤーに乗せて、見送つてくれた。クリスマスに、久しくご無沙汰していたこの店によつて義理を果した私にしても、実は陽気な心境であつた。

高速道路に乗つて、夜遅く家路についた私は、悦に入り、希望に燃えて、家に着くまで人生劇場の歌を繰り返し歌つていた。大好きな人生劇場の歌を、感極まつて歌つ

いた。こんな旨い酒を飲み、素晴らしい仕事の話に意氣を感じ、こんな考えに浸つた年の瀬は、今まであまり経験しなかつたことである。明日は天皇誕生日で休日である。ゆっくりと休養を取ろうかと思っていたが、孫のピアノ演奏の発表会があるそうで、折角だから午後から妻と会場まで出かける予定である。先日の帰りに見た東京タワーはライトアップされて真っ赤に燃え盛るようだつたが、今夜は遅いせいか、途中まで赤くライトが灯されて、これもまた違つた味わいの風情であつた。

十二月二十二日

## クリスマスのイブ礼拝

仕事を終えてあわてて銀座から地下鉄に乗り自由が丘までついた。玉川神の教会のイブ礼拝に間に合うか心配だつたが、教会についたとたんに鐘がなりだした。途中握り飯を頬張りながらであつたが、幸い時間に間に合つた。7時から始まる玉川神の教会のイブ礼拝の始まりを告げる鐘である。教会の十字架が星空にくつきりと聳え立つの眺めて、聖夜にふさわしい時を迎えることができた。礼拝堂に入つた。静まり返つた礼拝堂には、既にたくさんの信者が集まつていた。それぞれ片手に蠟燭を用意して、キリストの降誕を喜び祝う雰囲気が確かに感じられた。初めに小学生によるキリ

スト降誕の小劇が、影絵を以て語られていった。聖歌隊の歌う贊美の歌が、今年は真に迫つて美しく、胸に迫つた。妻も聖歌隊に参加していたが、きれいな贊美の歌が続いたあと、厳かに祈りが続けられて、そのあとにバートン牧師の説教があつた。イエスに出会える喜びを熱く語り、その出会いがクリスマスであると話された。終わりにイエスの降誕を祝うキャンドルサービスが始まり、ひとり一人が持つローソクに灯がともされて、会堂に喜びの明かりが広がつて、全員で「聖しこの夜」を歌い、愛と平和の御子イエスキリストの降誕を喜び祝つた。

もろびとのござりて歌ふ讃美歌にイブ礼拝の祈り妙なり

嬰児をひとり授かりうつし世に神のみ業の  
奇しき示して

みどり児のいと麗しきみ姿のかいばのおけ  
に居ねて安けき

うしきこと卑しき」とも打ちはらひ神のす  
がしき恵み浴くさむ

十字架のもとに並びて主を讃ふ歌に妻も加  
わりて立つ

もろびとのござりて歌ふ讃美歌に皆美しく  
見えし聖夜よ

クリスマスイブ礼拝にもろびと愛と平和  
の光ともさん

白百合のにほひ漂ふ会堂に立ちて十字架を  
仰ぎ見るかな

喜びと祝いひの声の歌となり星の聖夜にひ  
びきわたりぬ

わが仕事終へて聖夜のイブ礼拝急ぐ夜空の  
星のまたたき

星ぼしのきらめく空に教会の鐘なりひびく  
清き聖夜に

よき友ら聖しこの夜を歌ひつつイエスをたたへあすを目ざせり クリスマスイブ

二十五日のクリスマスの夜、あきほちゃんと、ゆきほちゃんの姉妹が、家内のものに英語の勉強に来ていた。毎週火曜日にやつてくるので、今年はもう見えないのかと思つていていたが、二人はイブの翌日のクリスマスの夜に延ばして、勉強しにやつてきた。

そのことをすつかり忘れていた私だが、仕事を終えて帰途に就いた私は、いつも姉妹が勉強を終えて帰る時間帯にあつた。知つていればもう少し早く帰れば、二人に会えたのに5分違いで帰つて行つたという。わかつていればクリスマスのお土産にケーキを持つていきたかつたが、と惜しまれた。おじさんの帰りが遅いねとつぶやいていたそうであるが、妻は今日は水曜日だから勉

強のない日だと思つてゐるに違いないと説明してくれたそうである。寒い風が吹いていたので、お母さんが車で迎えに来てくれた。それと行き違いになつて、小生は家に帰つてきた。ゆきほちゃんが小生に置き手紙を残していつた。

「おじさんへ、今日はクリスマスですね。会えなくて残念です。また来年会いましょう！」

優しい姉妹の気持ちに胸が熱くなつて、私は次のように書いてファックスしたのである。

「おじさんから。あきほちゃん、ゆきほちゃんへ

クリスマスおめでとう。神様の恵みが、秋保ちゃんと、ゆきほちゃんの上に、そしてまた皆さんの上に豊かに注がれますように。そして夢と希望にみちた新しい年をむかえますように、祈つています。

クリスマスに会えなくてごめんね。仕事を終えて急いで帰ってきたけど、間に合わなかつたので残念でした。風邪などひかないよう、元気で楽しく毎日を過ごしてください。置き手紙、ありがとう。

クリスマスの日」

テーブルの上には、クリスマスの日に開けるはずだった郵便ポストの赤い貯金箱が、そのまま置いてあつた。姉妹が私の為に用意してくれたものである。私は思いついたときに、ポケットにある硬貨を取り出してはポストに入れているが、これを開けるときに果たしていくら入っているかが楽しみである。あきほちゃんと、ゆきほちゃんも、もちろん関心を持つていてことだから、何かのご褒美に使いたいと、ささやかな楽しみを持っている。来年の一月に英検の試験があるというので、合格祝いにいいかなと思つたりしているが、受けるのは今のと

ころゆきほちゃんだけらしい。そこでゆきちゃんは一生懸命勉強をしているようだが、あきほちゃんは勉強している気配はない。

二人とも試験を受けて同時に合格してくれることが一番望むところだが、ゆきほちゃんは受けたくないらしい。家庭教師を務めるワifの先生は、このことで可愛い二人の間に差がついたりしてもいけないと思い、内心困つているようだ。来年の春には玉堤小学校を卒業して、雪歩ちゃんは市立を受験するというし、あきほちゃんは近くの公立の中学校に進むというし、双子の姉妹と云つても、それぞれに違う考え方を持つてゐようである。だんだんと大きくなつていくことであるが、かわいい二人の姉妹の毎日に、いつまでも幸せな道があつてほしいと思う。

クリスマス日にも勉学にふた姉妹たづねてくればいとも安けき

あんこうの鍋にせむとてアンコウの切り身  
二さや買うて帰り来

イブの日

## 年の瀬

穏やかに過ぎていく年の瀬である。しかし今年ほどいろいろな事件が起きた年も、まれにみる感じである。それほど世の中が文明の進歩とは逆に、人間生活の歯車が乱れて動いてしまっていることの証左でもある。科学万能時代に遭遇して、人間の思惟能力が減退してきていることは、嘆かわしいことである。しかしこのところ何事も起きずに年の瀬を迎えて、新年に向けて平穀に準備をしていることが、何とも言えぬ素

朴な喜びとするとの幸いを良しとしているところである。

小春日の日和に恵まれて、私は今年最後の日曜礼拝に出席した。妻が朝早く出かけ行つたがようだが、昨夜遅くまで私が仕事にかかわっていたので、妻が私の疲れを察じて仮眠中の私が起きないように静かに家を出て行つたらしい。今日は私が教会の日曜礼拝を欠席するのではないかと思つていたらしい。今日の朝は、一度早めに目が覚めてひげを剃り、体を清めたついでに兎に角食事を済ませた。寝不足意を補う、そのあの仮眠である。睡眠こそは唯一の栄養剤であり、健康保持の一一番の要件である。身体はもちろん、頭の回転も睡眠の及ぼす影響は大きい。快眠、快食、快便というが、そのとおりである。神経が高ぶつてゐる時ほど、人間生存はもとより、存在のための重要な三要素だと思っている。

幸いなことに、礼拝の始まる十五分前にぱつと目が覚めた。熟睡したわけではない。単に横になつて浅い眠りについているだけだが、それとて多少は疲労回復につながっている筈である。そう思うしかない。教会にはいつも車を飛ばして、あわててすつ飛んで行く。急げばたつた2、3分で行つてしまふが、それほどの近距離にある。いつも滑り込みである。しかし今年最後となる日曜礼拝には、気分的に少しばかりゆとりを感じて出席に間に合つた。受付にいた妻がいて役目を果たしていた。今日はひよつとしたら来ないとthoughtいたらしく、私の姿を見て喜んでいた。最後佳ければ始めよしで、逆説的発想も確かである。よい年を期待するなら、良い収めを済ますことである。糸余曲折の一年であつたが、過ぎ越し年を感謝する意味もある。おかげで今日一日はまだ終わっていないものの、帰宅して

から忙しく仕事上の連絡事項を済ませて、重要なきづかけを年内に収める成果を上げることができた。よつて三十一日の大晦日も出勤して残務を始末することになつていい。準備万端終えて、ともかく年を越したいと思う一念からである。そんなわけで、教会でひたすらなすべき仕事がうまく成るよう祈つてきたことが、神様によつて導かれたような気持になつたのである。

二十四日のイブ礼拝で一枚のカードを帰りがけにもらつた。バートン牧師がはがきに書いた墨字である。「真」という文字である。これはヨハネの福音書八章三十二節に出てくる聖句である。一文字の墨字は力のこもつた筆のあとであつた。はがきの裏にはこう書いてあつた。「飼い葉おけに泣寝かされた嬰児のイエスは、不変的な永遠の真理を現すためにこの世にこられた。そのイエスは「あなた方は真理を知り、真理

はあなた方を自由にします」といわれた。聖靈によつてひとり一人が審理を慕い求める心に恵れますように祈ります」とし

されてあつた。さらに続けて「クリスマスの喜びがあなたの心を満たし来る2015年真理に満ちる一年となりますように」と呼びかけと祈りの言葉が書かれてあつた。

先にも述べた様にクリスマスは、巷の華やかな様子と違つて、反面、厳肅な祈りの日である。日本的に要約すれば、一年を顧みて己の身を反省し、悔い改めと、希望を大きく抱く日もある。それを自覚して、さらに向上を求めて、神のご加護にある身に気づき、感謝して前進する決意の日でもある。そう解釈すれば、万人に神への信仰心を心に植え付け、平和と自由の尊さを実感させてくれるのではないだろうか。

「真」を説くバートン牧師のメッセージ自由解放の神のみ告げを

万人に機会を与ふクリスマス主との出会いに喜び合へり

新しい年に向けた素晴らしいカードをもらつて、来年こそは聖靈に豊かに満たされ、神のご加護のもとに努力研さんん努めようと思つた。すると、さらなる目標に向かつてまい進する気概があつふつと湧いてくるような感慨に慕つていたのである。神のみ言葉とともに生き、迫る年の瀬に思うことは、世界中が、愛と、光と、平和に満たされるよう願つてやまない。

## 短歌同人誌・淵

縁あつて、使命を帯びて私が主催する短歌同人誌・淵は、来年二〇八号を発刊する準備をしている。会計責任者の松田氏が夕方、前橋から上京された。上越の山々は今年はとても雪が深いという話を聞いて、西日本一帯から北海道にかけて今年の冬は激しい寒波に襲われそうですねと云う話になつた。信濃町の慶應病院から事務所に帰つてきたら、松田さんが背中を向けて座つており、事務の中村さんと話を交わしているところだつた。後ろから顔をのぞくようにしてお久しうぶりですと挨拶をした。黒い皮の大きな鞄を下げている。口が開いて中にいろいろな書類が入つてゐるのが見え、いかにも重そうに見えた。松田さんは郷土史研究にも詳しく、勉強家である。同時に植田重雄先生についても畏敬の念を以て師事してきており、私はまた違つた考え方を

持つてゐるので、大変参考になる話が多い。むろんその延長線上にある会津八一についても、独特の見方をされているかも知れない。鞄の中から出した一枚のパンフレットは、ある女性研究家が植田先生のことにつれて書いた記事であつたが、とてもよく書かれているので持参した由であつた。そこで私はそれをコピーして後日それを読ませてもらうことにしていた。話を本題に戻して淵の会計処理の報告を受けた。人数が多いので大変な仕事あるが、裏方さんを務めてもらつてありがたいと思っている。

何号か前の淵を取り出して、植田先生のうたを開いてみたら、こんな一首が目につけた。  
「あめつちの開けしはじめに歌ありて高

めきたりし人のこころを「」という一首である。私は常々多くの人たちにうたを詠むことを薦めているが、その本意とするところは、まさしく植田先生が詠んだかの一首を具現化するものだからである。歌を詠むことによつて、人の心は高みを目指して陶冶され、より充実した人間に近づけていくものだと信じて疑わないゆえんである。植

田先生の歌を拾い読みしていると次の歌に出会つた。「森に入り山をたどりて神々のひそかにめづる花をたづねむ」という一首である。幾多の思いを、完全に昇華したものとして生まれてきたものだと思う。その心境は清冽にして崇高であり、表現は躍如たるものがある。

不思議なもので、心を同じくする同人と会つているだけで、そのことについて触れなくとも、そうした心境になるものも、不思議である。息遣いで分かつてしまうこと

かもしれない。歌詠みの同志のかすかな心の触れ合いがあつて、こんな楽しいことはない。東の間であつたが、同人の松田さんから意味深い話を聞くことができた。

十二月二十九日

## 二〇一四年大晦日

白霜の立つ朝の陽にひとり立ち年の晦日の朝の陽にあり

白霜の立つ朝の陽にこの年の神のご加護に謝して祈れり

艱難の中に立つ身をわが崇む君は出で立ち  
守りたまへり

悪ろきこと祓い清めて新玉の年迎へんと神  
に乞ひのむ

いくたびそ夏より末に襲ひくる苦難に立ち  
て挑む吾なり

顧みて波乱万丈となる年のわが身を神は守  
りたまへり

この年も闇に光をさす君の求めに応へ努め  
はげめり

くる年もおほき仕事をなしとげて夢と希望  
につなぎ進まん

人のため世のため尽くし我が道を進むまさ  
きに光さしけり

年の瀬の晦日を迎ふ庭に立ち輝く陽にそ惠  
みあふれり

この年の晦日のいともあわただし荒事にく  
み除夜をむかへり

商ひの榮えし地元商店街アベノミクスの静  
かなる音

年の瀬の輝く陽をばうけつぎて新しき日を  
迎へたつなり

穏やかに澄みわたる朝庭にたちこの年の瀬  
の末に祈れり

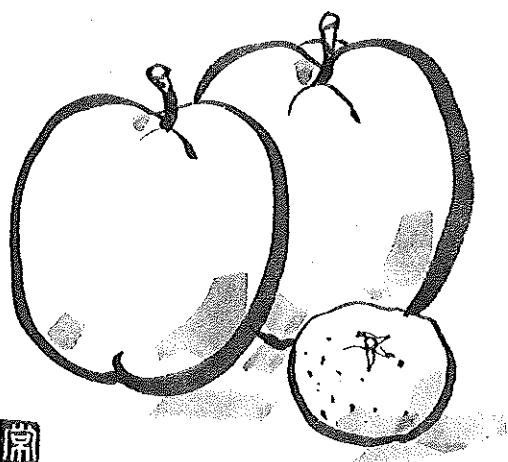
年越しの商ひに湧く尾山台鮮魚「魚辰」の  
店のにぎわい

雨やみて穏やかなりし年の瀬の晦日の鐘の  
空なりわたる

はるかなる富士の白ゆき遠く見て太平の世  
の大和まほろま

アベノミクス第三の矢を放てるに何はとも  
あれこれを成就す

この年の世界に起きてさまざまにされど生  
きるに英知を以てす 十二月三十一日朝



作品 関根常雄

### 短歌同人誌・淵の合評会

短歌同人誌・淵が発刊されると大体翌月の二週目の火曜日に、合評会が開かれる。参加できる同人が、随意に会場に集まって昼食を共にして約二時間ぐらいにわたりお互いの歌を鑑賞しあう。会場は決まっていて、銀座6丁目の角にある資生堂パーラーの三階の場所を借りて行っている。十七日の午後一時に出向いたところ、会場となる資生堂のビルが、電気工事の定期的な点検で休館であったので、ちょうど居合わせた仲間と一緒に他の適当な場所を探しながら銀座道のりを散策を兼ねて4丁目の方角に歩いて行つた。お天気も良く風もない穏やかな日和で気持ち良かつたが、銀座通りは多くの人で混雑な感じがするくらいであった。それと云うのもアジアからの観

光客と思しき人たちがぞろぞろと外国語を話しながら見物がてら買い物を楽しんでいて、お店は軒並みお客さんでいっぱい、盛況である。中国では昨日から春節に入つて、休暇を利用して過ごしよい日本にどつと押し寄せてきたようだ。買い物目的の人たちもわんざといるようで、商店街も受け入れ準備に大わらわである。中国のお客さんに更に景気づけをしてもらつて、アベノミクスの後押しをお願いしたいものである。

そんなことを思いながら銀座4丁目交差点にある和光の店の前によまで歩いて来た。そこで近くにある銀座ルノワールの店を思い出し寄つてみたのが、ちょうどタイミングよく居心地のよさそうな席が空いていたので二時間ばかり御厄介になつた。比較的広いフロアにみんなが同じように雑談しあつてゐるので、さして長居したとも思えないままに時間が過ぎてしまつたのである。合評会は久し

ぶりに充実したもので、みんなと過ごした時間は実に楽しかった。午後二時から来客が三組予定されていたので、その時間に間に合うよう、先に失礼してきた。いつもの会場には私が一番近いので先に席を立つのも恐縮である。会計幹事を務めて下さっている松田さんは、群馬の高崎から上京される。新幹線で快適と云われるが、この日のためのことながら、その労を多として感謝している。

席上、渋谷さんから次回の短歌鑑賞は、今年最初の号となるので、淵の代表の小生に書いてもらえないかと云う提案であった。責任者として辞退するには及ばないことゆえ、引き受けて書くことにしたが、各位の作品に目を通す責任が生じてきて、鑑賞の記事を書くとなると、はてさてどうしたものかと少し神妙に思つたのである。夕方、事務所で若干の時間ができたので、机に向かって書き始めたら一気に筆が運んで面白いように自分の思

いを書くことができた。A4のコピー紙に息つく暇もなく書き始めて1時間ぐらいして全部書き上げてしまった。13枚書き上げた。内容は即席なので、十分に自分の考えを正直に記すことができ、これで責任が果たせたと思った。書いているとこんなにも楽しいものかと、同人各位が提供してくれた歌題と、内容に触発されたものとなつた。

私流にいえば、俳句にしても短歌にしても、那一句、その一首を以てして、長編小説以上の意味合いと成果を持つていいことがある。聖徳太子は、一を以て十を知る、とも言われたが、あるいは祭神、歌人は、一を以て万事を知ると云つてもいいかも知れない。言葉を極限までに削ぎ落として、一つの核に近いものを取り出したようなものである。昔、東大の総長をしていた物理学者の有馬朗人教授を講師に迎えて、当会の講演親睦会を開いたことがある。その時、宇宙のビッグバンのこと

について興味深い話がなされた。有馬さんは俳句に造詣を深くし雅号を朗人と称して、多くのいい句を残していらっしゃる。会食と懇親会に移つて歓談するうち、芭蕉の名句、静かさや岩にしみいる蟬の声の一旬がある。文字通りに感じ取れるが、蟬の声が岩にしみいるという心象とは別に、芭蕉はもつと深く洞察して、宇宙の実態についてある種の知識を持つていたのではないかと疑問を呈したのである。そして芭蕉が大宇宙を前にして、その悠久の静寂さを感じながら、宇宙の果てから飛んでくる粒子を感じて、粒子が岩を透視して抜けていく物理現象を感知していたことをもじって詠んだのではないかと云う拙見を、物理学者の有馬教授に試みたのである。教授は一瞬驚いたように沈黙の後、それは又後の機会にお話ししましようとしてその場を濁したのである。これは今も忘れない歓談の一幕である。ただしその後、教授とこれに

ついて意見を述べ合う機会がないままに過ぎてしまった。

想像力豊かな芭蕉が、旅先で満点にきらめく星々を眺めながら、そうしたことを考え、宇宙のことについて天文学的に観相を深めて思索にふけつたとしても何ら不思議はない。空に煌々として浮かぶ月の存在について、なぜあの物体が浮かんで天体の軌道に乗つて動いているのか、少なくともその謎に迫つたとしても不思議ではない。だから静寂の間に、宇宙の果てから目に見えない物体が岩を貫通していく痕跡を感知して、俳句の世界に季語として蟬の声、その声そのものを一句に挿入したのではないか。そんなことを考えていくと、思索は無限の広がりとロマンを追つて限りがない。例えば私は人間の、その思索についても、いつも思つて人に話していることがある。人間社会で文明が急速に進んで、歩くことから始まって、速度をきそい合ってきた

歴史がずっと今までにあった。

人類の歴史は、生活的にはこのスピードをいかに現実のものとして結び付けていかにかかっていたとどちらてもいい。自転車、自動車、汽車、飛行機、比較してみると面白いことがわかる。音より早く飛んでいく物体を発明した。それを我々は器用に利用している。音速を超えるジェット機であつたりする。音より早いものは光だろう。これ以上に早いものはこの世の中にはない。と教えられてきてるかもしない。遊びごころと云うわけではないが、真剣にお考へいたくのも楽しいのではないだろうか。ところで有馬先生には訊ねたいと思つていた芭蕉の蟬の声は、果たしてその実体とは宇宙から飛んでくる粒子なのかどうかを芭蕉が考え及んでいたか、物理学者であり、俳人である有馬先生のお考へを聞きたいなと思っている。

翻つて、一月一五日に発刊された、短歌同人誌・淵の冒頭には年改ると題して植田重雄先生の歌が載つてゐる。「雨の夜の一夜」と、すべては謎である。神の創造物として人知の及ばぬところである。私はいつも友人や知人とそうした話になると云うことがある。先の芭蕉の俳句の蟬の声に象徴される意味合いを、別に考えてみたりするのと同じように、この世の中に光より早いものがあるというのである。なんだろうか。以前にも言つたりし

ているので、もしかすると答える人がおられるかもしれない。遊びごろと云うわけではないが、真剣にお考へいたくのも楽しいのではないだろうか。そこで有馬先生には訊ねたいと思つていた芭蕉の蟬の声は、果たしてその実体とは宇宙から飛んでくる粒子のかどうかを芭蕉が考え及んでいたか、物理学者であり、俳人である有馬先生のお考へを聞きたいなと思っている。

自分をしつかりと掴むことができるのである。  
おのずから祈りに通じて、感謝である。

脱線ばかりしてここまでたどり着いたが、  
さて淵に乗せた私の同人の歌の鑑賞は、いづ  
れ他日その原稿を事務員に打つてもらい、淵  
に発表することになるが、本欄にも転載して  
各位に楽しんでもらいたいと思っている。乞  
うご期待を。

二月二〇日



作品 関根常雄

## テレ東ビジネス・フォーラム二〇一五

建国記念日の休日である。穏やかに晴れ渡つた空が久しぶりに春めいて、輝いている。建国を祝うにはふさわしい感じがして十一時に家を出た。

この日が何で休日なのかと云う質問に対して正しく答えられない人がたくさんいたが、若い人にとっては無関心の人も多いようである。国の成り立ちに異論を唱える人、これを祝う人が居て二つの意見に分かれているが、戦前のように神国日本を唱え再び万世一系の天皇を頂点とした国体を危ぶむ人にとっては、苦々しい思いがするのである。軍國主義の復活は、今の国民にとっては大多数が望まないところである。反対する人の立ちは一緒に神々づいて、國の在り方について謎めいた議論を仕掛けてくるのもおかしい

ような気がする。目くじら立てて口角泡を飛ばして言い合うことではない。そうした意味で今の若い人の受け止め方が無難であって、自然なところではないだろうか。平和な日本の国としての気持ちの持ち方が素直に表れていて安心した。

逆だといわれても困るが、家に歴史があつて、先祖をまつことがあるように、国の成り立ちがはつきりして、それを国民が正しく把握することも必要である。昔あつた紀元節の歴史に求めたにしても、神武天皇を持つてきたからと云つて今更、だからと云つて、國の成り立ちを神格化する人もない。これを勝手に悪用しようとする人が居るから、事が歪曲されるのである。歴史の古さは、糺余曲折ではあるが國の確信と品格の一つの表現として、守っていくべきもので、ないよりはあつた方がよい。正しき道に統合する意思を持つことは、グローバル化を前にも必要なこ

とである。これからも糾余曲折の歴史を繰り返して、進歩と発展の道を冷静に、品格を以て進んでいくエネルギーとしなければならない。国の起源を以て、これを恣意的に解釈利用を試みたりしてはならない。戦前の教育制度や、教育手法を以て思想的、政治的に利用することがあつてはならないと思う。

テレビ東京が開局して今年で五〇年になる。五〇周年を記念して特別企画が六本木ヒルズのANAホテルの会議場で開かれた。八百人の招待客で会場が埋まつた。会場からあふれた人は熱心にモニターを見て場内の様子を受け止めることができた。

テレビ東京ビジネス・フォーラム二〇一五と銘打つてモーニング・サテライトが、東京とニューヨークを結んで約二時間をしてエコノミストたちが出席して論議が交わされた。総合司会を娘の明子が務めた。私が言うのもはばかりが、司会と議事の進行は余裕綽々で

よどみなく、さすがに完璧であつた。モーニング・サテライトは毎週月曜日から金曜日、朝五時四五分から約一時間、東京とニューヨークを結んで日々刻々として変わる経済情勢と最新の経済ニュースを中心とした報道番組で、明子がその総合司会を務めている。企業家はもとより、ビジネスマンはこれを見逃していくと、その日の勤務に事欠くことになり、必見の経済番組である。

東京の会場には四人の著名な若手エコノミストがコメントティターとして参加し、ニューヨークからは元東京大学教授で、このほどコロンビア大学教授に赴任した伊藤隆敏先生が参加した。

第一部では主として伊藤先生が赴任した先のコロンビア大学の様子と、学生諸君の学習生活についてビデオを流しながら興味深い話がなされた。研究の傍ら二六人の学生諸君の指導に当たり、日本からの留学生五人を含め

たクラスを持ち、週一回二時間の講義を持つ  
といふ。コロンビア大学ではアジアからの留  
学生が多く、特に中国からの留学生が際立つ  
ているとのことであつた。伊藤先生の将来の  
経済に対する見方は、依然としてアジア重視  
の姿勢で、アジア諸国の教育 (EDUCATION)、  
人口 (POPULATION)、投資  
(INVESTMENT) といった観点で世界経済  
の流れをとらえていくことが重要な三つの要  
素と指摘、やはり今後の課題は中でも教育で  
あるとした点が注目された。アジア各国とも  
教育の向上を目指して、将来の発展の大前提  
条件にして考える傾向にあると指摘していた。  
伊藤先生は、そうした世界的傾向にある大き  
な流れを凝視し、その使命感に触発されて今  
回、コロンビア大学に行かれた大きな理由の  
一つかもしれない、私は思つた。伊藤先生  
には、昭和経済にも論文を掲載させてくださ  
り、感謝に堪えない。

第二部では、原油価格の下落について、現  
状の分析と将来の動向について議論された。  
4人のエコノミストがそれぞれの見解を披歴  
したが、不確定要素が多く、見通しが流動的  
であつたりしたが、今後の傾向としては、下  
が四〇ドル、上が六五ドルあたりが見込まれ  
るが、今年の動向はその範囲内と思われる  
というのが結論であつたようと思われる。パナ  
リストの意見がそれぞれにあって、違った見  
解が確信的に持つているところが大変に面白  
く受け止めたのである。原油価格がこの半年  
間で半分になるという激しい動きは誰しも予  
想しなかつたことは確かで、それだけに世界  
経済に与える影響、衝撃度は大きいことは確  
かである。九九%を輸入に頼る日本にとつて  
メリットは甚大であるが、反面円安も大きく  
影響し、実効的なメリットがその分相殺され  
てしまつてゐることも事実である。円安と原

油安を一度に享受して順風満帆の企業、円安と原油安に苦しむ企業と、経済界も産業界も明暗が二つに分かれて、容態はさまざまであり、悲喜こもごもで大荒れと云つたところであるが、アベノミクスにとつても追い風となつてゐることは好ましいところである。会場を埋め尽くした聴衆に、日常生活において原油安のメリットを実感しているかどうかを訊ねたところ、わずか二名の人が賛成の挙手をして、ほとんどの人が実感していないという結果であった。原油安が実感として、国民生活に良好に影響してくるのは、タイムラグでこれからかもしれない。かくして二時間に亘る白熱したフォーラムは有意義、かつ盛会のうちにめでたく終了し、テレ東の開局50周年・特別企画、モーニング・サテライトは大成功であつた。スタッフ一同はもとより、明子の大役の労を多としたい。

外に出るとまだ温かい日差しあつた。六本木ヒルズのゴールデン・ガーデンに出て名店街の一つの中国レストラン、陳麻婆豆腐と云う名の店に腹ごしらえに入った。婿殿と会社の友人のT嬢も誘つて妻と四人である。T嬢は東大大学院からコロンビア大学に留学したという明るい性格の才女である。勉強好きな子だなあと感心した。最近の女性の中にはこうした子を多く見かけるようになつた。明子を尊敬していく自分もアナウンサーを希望しているのだといつて。目下、明子の婿殿が在籍する外資系の大手証券会社に勤務している。宣伝するわけではないが、いい人が居たら結婚したいとも言つていた。ここの中華料理はさすがに六本木ヒルズに構えるだけに実にうまかった。明子の住むマンションの代官山の近くまで婿殿の車で送つてもらい下車の後、代官山界隈を散策した。本屋の蔦屋によつてあたりをぶらつき、若者の街を一緒

に樂しんだが、今様の人氣の高い界隈だが、一風変わつた得体の知れない街だなあとも思つた。華やかなブティックの店が並んでいる隣に、ぼろくその家屋があつたり、旧式の印刷工場があつたりして見栄えを損なう感覺が不可解である。あんなのは邪魔だから早く撤去してさっぱりとすべきだろうが、住んでいるのが変人だつたりするとお手上げで、どうしようもない。だから逆に面白いのかもしれない。東横線に乗つて午後六時に帰宅した。

今日のフォーラムを見ていても娘は、難しき経済の問題の仕事をよくこなして頑張つてやつていると、内心思つていたのである。私事になるが、おじさん、おばさんとして尊敬していた日本経済新聞社の社長、萬さんが生きていたら大層喜んで下さつたに違いないと、昔のことがまた懐かしく思い出されたのである。私は夢ばかり追つていて、しかしながら志を高く抱き、大学を出たらマスコミの世界

に入ったて、有能な経済記者になつて、ゆくゆくは大蔵大臣を目指してなんて、若者にありがちなでかい夢を抱いていたが、所詮夢は夢でかなわなかつた。就職先に朝日だけでなく、日本経済新聞社もその視野に入つていたが、駄目だつた。

萬さんは日本経済新聞社の歴代の社長の中でも、中興の祖として尊敬されている。昭和四〇年代初めのころと思うが、茅場町から現在の大手町に本社を新築して移し、設備の近代化に努め、その後の大發展の基礎を打ち立てたのである。茅場町の古い本社に社長を訪ねたころ、その設計図面をテーブルいっぱいに広げて誇らしく説明してくださつたものである。卒業間近かのころ大学でのこの成績ならせひ我が社に来てくれと云われたが、期待に添えず夢がかなわなかつた。学者になるなりざ知らず、マスコミの世界は大学の成績が良くても、一般常識が豊かになければ駄目

である。学者はもとより、マスコミを断念して馬鹿馬鹿しいと思つたが車馬に出た。しかししそのことが幸いして、萬さんとは社会人として付き合いを深めていった。三男坊だから親父の意見も制約もなく、もともと自由の身である。サラリーマンと云う姿を商人の立場から見ると、大会社も中小会社も同じこと、使われている身だから大差ない。そんな時親父ががんで亡くなってしまった。不安だった。しかし大学時代の延長線に乗つて、己ながらに研鑽に努め、盤石の基礎を得たので全てに悔いはなかつた。残されたお袋にできるだけ心配をかけず、孝行に努めなければならぬと思つた。そして独立してからは自由闊達、面白いように商売ができた。結婚の仲人も萬さんにしてもらい、さらに家族ぐるみの付き合いになつていろいろとお世話になつた。大學とグット・バイして社会に出、数年間は下積みの苦労をし、付き合いくださつた人たち

の恩義を忘れない者に成長したつもりである。独立して事業を営むようになつてからの萬さんと、家族同士とも親交はいよいよ厚くなつて多くを勉強し、楽しい思い出が作れた。

萬さんは私のことを信頼し、そのうえ息子のように思つてくださいつた。いつも僕の友人だといつて、親しい人に紹介してくださつていたことも懐かしく思い出い出されるのである。大手町に日経の新社屋に本社が移つてからも、四階にあつた社長室にたびたび尋ねたりしたが、その都度楽しく迎えて下さつた。そうだ、あの時の秘書課長をしていた金子さんはどうしているかな。萬さんが社長、会長を辞めて顧間にしばらくなつっていた時には、日経をやめたら二人で共同して今の僕の事業に参加して、新たに事業を始めようと、希望を膨らましていたが、それを果さずに、ある日、忽然とこの世を去つて行かれた。無念である。振り返つてみると万感胸に迫るもの

のがある。子供たちも萬さん夫妻から可愛がられて、たくさんの思い出を作つてもらつていい。

顧みて今の明子の仕事とその成長は、私の若いころの夢と志の半分くらいを代わりに満たしていくくれているに違いない。女性の品格と生き生きとした華やかさも加わっているから、魅力はそれ以上かもしれない。曲がつたことの嫌いな子で、性格もいいし頭もきれいし、周囲の信頼を受けて、よくやっていると感心している。

\* \* \* \* \* コヒー・ブレイク \* \* \* \* \*

触発された小生は、コメンテーターのようならつりになつて次のような時事意識を以て会場を出た。いずれ問題にして拙論を素人として書いてみたいと思っているが、小生の近辺は、最近下らぬ雑事に巻き込まれて、これを以て時間を費やされてきており、慚愧に堪

えぬ。この状況から一刻も早く脱却したい一念である。春にちなんだ香わしい花の心境にもほど遠く残念であるが、豆まきを終えて、鬼の悪童ものを追いかつたあと故、いざれ捲土重来、奪還は一気呵成で臨んでいきたいと思つてゐる。ならば世界に大きく視点を移してみると

責任重大の安倍首相の施政方針演説の意義。あつ晴れ！ 全中、全国農業協同組合中央会の解体か。

ウクライナ東部戦闘状態の止揚・四者会談

イスラム国の矛盾と瓦解

原油安と円安の相乗作用の日本経済

と云うことになつて、超多忙を極めてくる次第だが、むしろ早くそくなつてほしいと思う。

二月一日

## 新年の内外経済を展望する

三菱UFJリサーチ＆コンサルティング

経済評論家 五十嵐 敬喜

に選挙があつたわけではないので、そういう意味では、二年たつたこの段階でアベノミクスに對して国民がどう評価しているかということが問われるという意味でもいいかもしません。

アベノミクスで何が変わつたのかということです。御承知のように三本の矢があると言われています。一本目が財政再建、三本目が成長戦略、規制緩和ということですが、一番世の中に大きな変化をもたらしているのが第一の矢の金融緩和です。安倍さんはもともとこういうことを言つていました。まだ自民党総裁で首相でもないとき、「民主党政権下で日本経済が長年低迷していると、これを何とかしないといけない。そのためには必要なことが実は二つある、二つの課題を何とかして克服しないと日本経済はよくならない」と。

五十嵐氏 まさかの衆議院解散、総選挙になつたわけですが、誰もが何で解散するのかと訝っていたと思います。安倍首相は、今、佐々木理事長がおつしやつたように、消費税の次の引き上げを先送りするという大きな決断をしたので、国民にその信を問うのだとおつしやつたし、その後、新聞報道等も含めて、アベノミクスをどう評価するかを国民に確かめてみたいという思いがあつたに違いありません。確かにアベノミクスが始まつたのは二年前の暮れのことですから、それ以降

一つは、もちろんデフレである。もう一つ

は円高だと。このデフレと円高を何とか克服しない限り日本経済よくならないと。そのためには必要な経済政策は何かというと、大胆な金融緩和だと安倍さんは言い続けていました。

金融緩和というのは、御承知のように、お金を借りやすくする政策ですから、本来金利を下げるなどをいうわけですが、日本の場合はもう金利をどんどん下げてしまっていたので、その先で緩和をするというときにはお金の供給を増やすことだと、こう理解されてるわけですが、大胆にお金の供給を増やすことによって、デフレと円高を是正する。これが安倍さんが言っていた政策であります。そうしたときに、このお手元の資料を見ていただきますと、株価の相場のグラフで、日経平均株価と為替、ドル・円レートで、歴然とした証拠が残っています。当時の野田首相が国会で解散すると言つた日が二年前の十

一月十四日、二〇一二年の十一月十四日に野田さんが解散すると国会で言つたのです。このグラフは、その日を境にして、それまでは比較的小幅に相場が動いていたのが、この日を境にして、急激に株高・円安に進んでいます。株高に行つたこと、円安に行つていると、いうことがはつきりと分かります

何故こういうことが起こったかというと、時の首相の野田さんが、国会を解散すると言つたことは、選挙をして、次は自民党の政権になるだろうと確信したのです。となると、当時の自民党総裁の安倍さんが、かねてから主張しているように大胆な金融緩和をして日本経済を再生させるのだと、デフレと円高を是正するのだと言つていたわけですから、その発言というのは、要は次の首相の発言ですから、だつたらきっとその政策は実行されるだろうとみんなが思つたわけです。

この大胆な金融緩和が実行されると、デフ

レと円高が是正されます。円高が是正される、つまり円安になるということは、輸出企業の収益がよくなるということです。輸出企業の収益がよくなると、日経平均のあの顔ぶれを見ていると、輸出関連大企業が沢山並んで入っていますから、結局円安になると輸出関連株が値上がりして、日経平均自体が値上がりすると見るのが常識です。日本では円安だと株高だと、こういうことで、大胆な金融緩和で円安が起ころるのなら、株高だと、こういうふうに思つたわけで、見通しとしては正解だつたわけです。

そもそも大胆な金融緩和、即ちお金の供給を増やすことで、何で円高や、あるいはデフレが是正されるのかというと、これは経済学の教科書を読むと、いわば答えが書いてあります。一番肝心なのはデフレを克服するということです。このデフレというのは物価が持続的に下落することをいいます。これを克服

するというのはインフレにするということです。では物価とは何だと改めて考えてみますと、例えばこの時計が一万円だとしますと、それはどういう意味かというと、ここに一万円札があると、この一万円札とこの時計が一対一で交換されることを意味しますね。しかし、今、何かの理由でお金の価値が下がつてしまつたので、一対一の交換から二対一の交換に変わつたらどうですか。時計は二万円になります。だからお金の価値が下がると物価は上がる。価値が下がる。このお金というのは円ですから、円の価値が下がる。円安だと、ということは、お金の価値を下げてやると、物価は上がるし、円安になるわけです。つまりまさに二つの課題、デフレと円高が是正されるわけです。お金の価値を下げてやればいいということです。

ではお金の価値は、どうやつたら下がるかといえば、物の価値を下げたかつたら、あります

がたみが薄れるほど供給を増やしてやれば、それは価値が下がるでしょう。お金の供給を増やしてやればいいわけです。ではお金の供給を増やす誰が増やすのかと言えば、もちろん日銀です。日銀にはお金を印刷する輪転機があるじゃないかと安倍さんは言つたわけです。輪転機をひたすら回せば、お金の供給は幾らでも増やせます。実際一万円札一枚印刷するのに幾らかかるのだと、たった一六円です。一六円で一万円が作れる、ただみみたいなもんじやないかと。この計算でいくと、一六〇億円使つたら一〇兆円分の一万円札が作れます。

三三〇億円で、二〇兆円分の一万円札が印刷できるじゃないかと言うことです。二〇兆円といえど、一億の国民に、一人当たり二〇万円ずつ、三人家族というなら六〇万円渡せます。そのお金が何とたつた三三〇億円のコストでできるのです。やつたらいいじやないか。実際に簡単なことじやないか。年間の日本全体

の個人消費、一年間合計して三〇〇兆円ぐらいいです。そこに二〇兆円のお金を仮に乗せたら消費なんか6%や、7%位すぐ増えますよ。そしたら物価だつて上がるのではないか。実に単純なことです。でも当時の白川日銀総裁は、そんなことはできないと、こういう立場だつたわけです。だつたら自分と同じ考え方の人を次の日銀総裁にすると言つて、黒田さんを引っ張つてきたということです。

しかし、今申し上げました話は、お金の供給を増やせば、お金の価値が下がるから、円安になりますし、デフレも克服されるということです。デフレというのは諸悪の根源と言われてきました。つまりデフレだから企業も、商店も値上げできなくなし、結果として、売り上げも利益も増えません。としたら従業員の給料を上げてやることも出来ません。給料上がらなかつたら消費が増えません。消費が増えなければ売り上げが増えないと言う、ま

さに悪循環です。全てデフレのせいだと、だからまずデフレを克服しないといけません。そのデフレが、お金の供給を増やすことで克服されるわけです。ということは、円安なら輸出企業だけかもしれないけども、デフレが克服されるというのは、全ての企業にとって経営環境がよくなることですから、株価は上がるに決まっているわけです。ということで、このお金の供給を増やすことによって、円安と株高が起こることなのです。

円安・株高のこのグラフが示していますのは、野田さんが解散すると言ったその日から円安・株高が始まっているわけです。黒田新総裁が異次元の金融緩和と言われる、びっくりするぐらいお金の供給を増やしますよ、と言っているこの政策がいつ発表されたか。一昨年の四月です。野田さんが解散するとおっしゃつたのは一昨年の十一月なわけですね。だから黒田さんがこの大胆な金融緩和政策

を発表して、実際にお金の供給を増やし始めたまで、五ヶ月間ぐらいいは白川総裁のもとで別に今のようなお金の供給が増えていなかつた。にもかかわらず、相場のグラフを見ていただきますと、猛烈な株高・円安が進んでいると言うことがわかります。実際、四月に黒田さんが新総裁として今の金融政策を発表するときに、野田発言から四ヶ月、五ヶ月ぐらいたつていてるわけです。しかし株価はもう何と四割以上上がっていました。為替は一円から円安に進んでいました。つまりお金の供給を増やしてもいいのに円安・株高が進んだわけです。教科書が教えてくれるのは、お金の供給を増やせばお金の価値が下がる。だから円安になるし、そして株高にもなる。こういうことだったのですが、お金の供給を増やす前から、相場が大きく動いているわけです。

しかも、この後ですが、細かい話を別にし

ますと、一〇一三年に入つてから五月のこと、もう五月に一万五六〇〇円台まで株価は上がつているのですが、そこからはグラフをご覧のように上がつたり下がつたりをずっと繰り返していく、やや一〇〇〇、二〇〇〇円位の幅で考えますと、一昨年の夏頃から昨年の秋まで、一年以上の期間にわたつて実は株高も円安も進んでいません。このグラフを確認していただきますと。それ以前の五カ月間というのは、あるいは五月まで含めた半年間というのは猛烈な上昇です。まさにトレンドとして猛烈に上昇しているわけですが、その後の一年余りは大局的に見て横ばいだと考えてもいいと思います。

でもおかしい気がします。つまり黒田さんは一昨年の四月に、「日銀はデフレの克服を目指にして、具体的には消費者物価を2%位引き上げる。前の年に比べて物価が2%位上がるような状況を当たり前のように実現す

る。あるとき瞬間に2%上がるというのではなくて、物価というのは普通2%位上がるものだとみんなが思えるようになるまで、そういう安定的な物価上昇として2%を目標にする。そのために、これから二年間でお金の供給を倍増させる」と、このように言つたのです。これはマーケットをびっくりさせました。二年間で倍増というのです。これはすさまじい政策をやると言つて、一昨年の四月から始めたのです。一昨年の四月に確かにびっくりするような政策が発表されたから、五月にかけてさらに株高・円安は進んでいきました。しかしながらお手元のグラフをごらんいただきますと、その後、一昨年の半ばぐらいから昨年の秋ぐらいにかけて、結局株高も円安も進んでいません。でも日々お金の供給はずつと増えているわけです。にもかかわらず相場は動いておりません。動いてはいるのですが、トレンドとして円安・株高が進んで

いるわけではありません。お金の供給を増やす前に、既に大幅に円安・株高が進みました。ということは、こういうことは、こういう意もなります。お金の供給なんか関係ないと云ふことです。お金の供給を増せば円安・株高になるというのを、それは経済学が教えてくれることかも知れませんが、供給を増やす前から円安・株高が進んでいるし、日々供給を増やしているさなかに進んでいるわけではないので、関係ないということです。これが実はアベノミクスの第一の矢、金融緩和で何が起こっているかということなのです。

もう少し説明しますと、円安だと株高だというのは、まさに相場でその値段が決まって、その値段がどんどん一方向へ動いていくということですが、相場でどうやって値段が決まっているのかというと、これはもう言うまでもなく需要と供給の関係で決まっているわけです。需給の関係で決まっているわけ

です。買いたいと思う人が増えれば、当然値段が上がり、売りたいと思う人が増えれば下がるという、こういう関係で、需給で値段が決まっているのですが、問題は、需給は何で決まっているのかということなのです。

これは、思惑です。これは私の意見ですが、思惑だということです。思惑とは何かといふと、上がると思うか、下がると思うのかということで、為替市場にしろ、株式市場にしろ、実に膨大な数の人たちが売買に参加しているわけでして、この人たちが、上がると思う人はどうするか。上がる前に買っておくわけです。下がると思う人は下がる前に売つておくわけです。上がると思う人が、上がるのをじっと待っているなんていうことは無いわけです。まず買って、上がったところで、しかもべきところで売り抜く。下がると思うのだったら先に売つといて、下がったところで買い戻せばもうかるわけですね。つまり上が

ると思つた人は買うし、下がると思つた人は売るということなのです。これを思惑による売買というか、投機的な取引といいます。

それに対しても実需取引というのがマーケットにはあります。例えば為替市場だとわかりやすいのですが、輸出企業が輸出してドルを手に入れました。それだけでは終わらないわけです。このドルを、今日か明日にはともかくとして、ドルを売つて円にかえないと終わらないわけです。この人は必ずドル売り、円買いをする人です。あるいは日本の政府が米国債に投資しようと思ったら、円で集めた保険料を、今日か明日かはともかくとして、円を売つてドルに換えて、そのドルでしか米国債を買えない。ということは必ず円売り、ドル買いをする人ですね。このように始めから売り買いの方向が決まつているような取引のことを実需取引といいます。

それに対して投機的取引というのは、どつ

ちだつていい。上がると思うなら買うし、下がると思うなら売るという、こういう取引です。マーケットの膨大な量の取引のうちどちらが多いのですかといえば、圧倒的に投機的取引が多いのです。九割以上、場合によつたら九九%は投機的取引というぐらい、この投機的取引のウエートが大きいのです。ということは、マーケットで例えば日本の貿易赤字が拡大したから、これは実需面から見て円安です。これはそのとおりなのですが、実需が円安を指していても、投機的取引をしている人が今は円高だと思ったら、この人たちが円を買います。そしたら実需は円安だと幾ら言つてみたところで、相場は円高に行くわけですね。そういう意味で、実は思惑が左右する投機的取引こそが相場を決めているのです。そこで、話を戻しますと、野田さんが解散すると言つた。ということは、次はもう自民党になる。ということは、安倍さんが言つて

いる政策が実現する。ということは、円安・株高だと、こういうふうに思つたのです。思つたから、思った瞬間に行動を起こしたわけです、皆な。最初は半信半疑の人もいたと思いますが、実際相場が円安・株高に行き始めたら、ますます多くの人がその株買い、円売りに参加して、このとおり急激に大幅な円安・株高が起つたわけです。

一昨年の半ば頃から昨年の秋ぐらいまで、何で動かなくなつたのかというと、飽きてきたのですよ。この投機をしている人たち、あるいは思惑というのは、一つの材料でいつも同じことはしません。もう飽きてきたのですね。例えてみれば、黒田シェフがテーブルの上にすごいごちそうを並べてくれたわけです。みんなその量と、その質の高さに圧倒されて、感激してむさぼり食つた。そのことが大幅な円安・株高につながつた。しかし、どこかでふと気がついた。このごちそう、相

変わらず沢山ある。美味しいと。しかし、昨日と同じだと。先週もこれだつたと。先月もこれだつたというふうにだんだん飽きがくるわけですね。だから要らないとか言うと罰が当たるけれども、しかし、だんだんありがたみが薄れてきた。ということで、別に下がることにはならないけれども、上がる力もなくなつて、横ばいに終始したということです。何のことはない、お金の供給を増やすということが相場にはきいていいというわけです。思惑を動かしたことによつて相場は動きましたが、お金の供給を増すことがお金の価値を下げて、デフレ克服、円安といいうような、そんなメカニズムは働いていないということだと思うのです。

でも相場が動いたということは実体経済には影響が当然出ているわけで、株価が上がりつて、株を持っている人はもうほくほくです。何せ野田さんが解散すると言つたときには

株価は8600円台だったわけですから。それが半年後には1万5600円台まで行つたわけですね。だから6000円、7000円も値上がりしたというすさまじい値上がりで、一昨年一年間に家計が保有している株式の価値が何と25兆円ふえています。25兆円というのは、さつき一年間の日本全体の消費の総額が300兆円だと申し上げましたから、25兆円というのは十二分の一です。

一月分の消費額に相当するぐらいの金額、値上がりがあったのです。しかし株を持つているのは十五%の人たちにすぎないので。この株を持つている人たちだけにとつてみれば、計算してみると、恐らく年間の消費額の半年分にも相当するような値上がり益がありました。誰が株を持つているのですかといふと、シニアの人たちがほとんどです。シニアの人たちのところで大変な値上がり益が生じました。

一昨年（平成二十五年）は実は景気は結構よかつたのですが、何でよかつたかと申しますと、個人消費が伸びて景気を引っ張つていただけです。個人消費はどういう環境のもとで伸びるのでしようか。普通は収入が増えれば消費も増えるということです。でも一昨年、消費が増えたけれども、収入額が増えてないのです。一昨年は、収入が増えてないのに消費が増えていたのです。何故か。それは株の値上がり益があつたのだなということが想像されるわけです。実際、家計調査という統計で調べてみると、年代別に家計を分けてみて、一体どの年代の人たちの消費が伸びて、全体の消費を引っ張り上げたかというのを調べてみると、六十代以上の世帯なのです。世帯主の年齢が六十代以上の世帯なのです。そこで消費が一〇〇増えたとすると、その大半が六〇代以上の人気が持つている株の値上がりによるものと思われるのです。六〇代以

上の人たちですから、七〇代、八〇代、九〇代もみんな含まれるわけです。でもこの人たちの主たる収入源は何ですかといつたら、給与所得ではありません。年金かもしれません。年金かもしません。では年金が増えたのですか。増えていませんね。では何で消費が増えたのですか。恐らく保有している株式の価値が猛烈に膨れたと。このことで、これの一部が消費に回ったのだろうと思うのです。

一般論として言えば、このシニアの人たちというのは、自分の金融資産は減らしたくないと思っている人たちです。元本には手をつけたくない、利子や配当はともかくとして、元本を減らすことはしたくないと、そう思う

罰には当たらないと、心配ないと、こういう思いで使われたのではないでしょうか。だからこのシニアの人たちの消費が、一昨年の消費を持ち上げた。こういうことになるとと思うのです。

ところが、一昨年の半ば頃は株価は上がりませんでした。一昨年、株価が上がって、後半ぐらいから、昨年の秋ぐらいまでの一年ぐらいについては株価はもう上がっていないということですね。そうすると、一昨年の後半の水準というのは一万五〇〇〇円ぐらいまで行っているのです。でもその前の年は八〇〇〇円台だったわけですから、実は一昨年の前年の年は、さらに前に比べると、株を持つ人が多いと言われていますけども、この持っていた株式の価値が猛烈に増えたわけです。しかも増えた額というのは自分の年間の消費額の半年分にも相当するような値上がりがあつたとしたら、その一部を使うぐらい

万六〇〇〇円を超えた瞬間もあつたけれども、一方で一万四〇〇〇円台まで下がつてしまつたときだって当然あるわけでして、その意味では上がつていないと言うことになり

ます。一昨年と昨年を比較すると、株の値上がり益は享受できていないと。こういうふうに考えると、株を持っている人たちが、昨年の消費を持ち上げるというわけには実はいかなかつたということが想像されるわけで

しかも、昨年の四月から消費税が上がりました。消費税というのは3%上がつたのです。物価を2%押し上げています。というのには、消費税は全てにかかるわけではなくて、家賃にはかからないとか、医療費にかかるないとか、授業料にかかるないとか、自動車保険にもかからないとか、かからないものがそこそこあつて、三分の一ぐらいは対象外だと。三分の二が対象になつて、それが3%値上が

りするから物価全体は2%上がる。こういうことなので、2%物価が上りましたということです。

それと、それ以外の理由で、既に物価は1%強上がつていました。何かと言えば円安ですね。円安も進みましたから、円安で輸入物価が上ります。例えば原油価格が上がる。そうしたらたちまちガソリンの価格も上がるし、電気代も上がるというよう、消費者物価が上がるわけです。

そういう意味で、消費税のせいで2%物価が上がつています。それから、それ以外の理由で1%強の物価が上るということは、3%以上物価が上がつていると。昨年の状態はですね。3%以上物価が上がつてているのに、給料は1%少しです。一昨年景気がよかつたおかげで、昨年ベアも含めて多少給料が上がつたので、1%少し給料が上がつていています。でも物価は3%上がつていてるわけですから、

結局実質的には給料減ったのと同じだと。一昨年は株価の値上がり益でもって消費してくれたシニアの人たちが、ことしは値上がり益はないよということで、なかなか消費に向かわない傾向です。我々サラリーマンは実質的に収入が減っています。ということになると、それで消費が落ち込むことになって仕方がないということです。だから昨年の景気は悪くなりました。こんなことが今起こっていると思います。

日銀は、デフレを克服すればうまくいくと言っているのですが、今、物価はもう上がっています。消費税のせいで2%、これは仮に除いたとしても、でもう今1%ぐらいは物価が上がってきているわけです。そういう意味で、もうデフレではないということなのですが、それではこれで景気はしつかりしてきたのですか、そうでもないわけですね。つまり物価が上がればいいというふうに考えている

のは間違いだと思います。デフレというのは確かに物価が持続的に下落することをいうんですけど、逆にデフレを克服するというのは、物価が上がるような状態に持っていくということですが、それでは物価が上がればそれでいいのですかというと、そんなことはありません。

実は物価が上がるには大きく分けて二つの理由があります。一つは、コストが上がつて物価が上がることです。特に輸入コストが上がつて物価が上がるというのが今起こっているのですが、円安のせいで輸入価格が上がります。そうすると、輸入した業者とか、あるいはその後の流通業者の人たちは、コストが上がるわけです。その分を価格転嫁できないのだつたら、コストが上がつたものを自分たちでのみ込まないといけません。腹を痛めざるを得ないので。つまり利益が減ってしまうということです。もし転嫁できる

のだつたら、これは家計が今度は同じものを同じ数だけ買うのに余計に金を払わされるわけだから、家計が負担するわけです。いざにしる輸入価格が円安のせいと上がつた瞬間に、日本から所得が海外に逃げていくわけなのです。ガソリン代なんか典型ですね。ガソリン価格が上がりました。昨日よりもリツター当たり余計にお金払つていまます。余計に払つたお金は、誰の懐に行くのですか。スタンドの経営者ですか。石油の元売り会社ですか。違いますね。全部産油国に行くわけです。日本から所得が奪われていくわけですね。所得が落ちるわけですね。物価が上がるわけですね。物価が上がって、所得が下がつて、デフレ克服、よかつたつて何で言えるのですかということです。

でもおかしなことが起つていて、ついこの間、一〇月の最後の日に、ハロウインサプライズとか言つてますが、ハロウインの日に

日銀が追加緩和をしたわけです。何で追加緩和したのでしょうか。今はデフレの克服が日銀の最大の目標です。そこで、皆なが物価が少しずつ上がるのではないかと思いつめていました。これをデフレマインドの払拭と、日銀は呼んでいるわけです。少しは物価が上がるようになる、というふうにみんなが思い始めました。そのときに原油価格が最近大きく下がつてきています。おかげで物価上昇率もちよつと小さくなつてきました。プラスだけ、1%を超えていた物価の上昇率が、1%を割り込むような感じでちよつと下がつてきました。これでみんなのデフレ克服マインドがちよつとなえてしましました。それが心配だからつてと日銀は言つてるのですが、おかしいですね。日本みたいにエネルギーのほとんど全てを輸入している国にとって、輸入エネルギーの値段が下がつたら、ありがたいに決まっています。それをデフレ

克服、何というか、差しさわりが出るから困ると言つてはいるわけです。ともかく物価が上がればいいのだったら、もう答えは簡単です。原油価格が上がつても国内で物価が上がる。それがデフレの克服だと言うのだったら、サウジやカタールに行つて、日本向けの原油価格とかLNGの価格を上げてくれと、日本向けだけ上げてくれと言えば、物価なんかすぐによ上ります。それが望みですか、それでいいのですかということですね。そういう意味で、ちょっとおかしなことが起こつているのです。

物価を上げること自体を目標にして、そのためにお金の供給をどーんと増やすということをやつたら相場が動いたわけです。それは思惑を刺激したからです。何で思惑が刺激されたかというと、経済学の教科書に書いてあるからです。経済学の教科書には、それは

円安・株高の理由だと、原因になると書いてあるからです。そうかと言つて、思惑がそれによつて生まれて、みんなが株を買い、円を売つたから、本当に株高・円安になつたのですが、でもそれは思惑のなせるわざであつて、本当の意味で、つまり実需が円安・株高を生んだわけではないということなのですね。結果として、株高は一昨年の景気をよくしましてけれども、円安はみんなの所得を海外に流出させるという効果をもたらして、景気を悪くしているわけです。

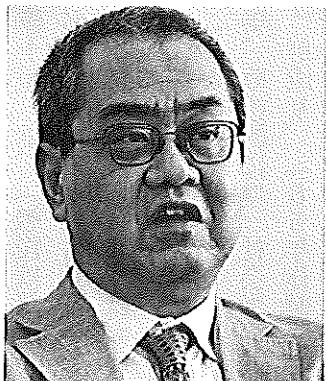
続く

## 戦後七十年

十年の「輪切り」で政治再考  
国の価値を問う議論へ

東京大学名誉教授

御厨 貴



年が改まるや、巷間「戦後七十年」「古希の戦後」と喧しい。その割に本当に70年の意味を探り当てているかと言えば、怪しいものだ。今年の流行語大賞になつておしまい、というのでは余りにもお粗末である。

「十年一昔」という。ならば「七十年七昔」という発想があつても良いはずだ。10年ごとに7回、戦後政治を串刺しにして、その特色を明らかにしたらどうだろう。「戦後政治10年ごとの輪切り」を試してみよう。

あの戦争の敗戦日たる8・15から戦後の歩みは始まる。まずは番外の「戦後ゼロ年」。昨年公開された「昭和天皇実録」によれば、戦前と戦後をつなぐ天皇と宮中の変わらぬ営みがある。だが占領と民主化のざわめきの中で、昭和天皇は、昨日と同じくあるように見える今日を、明日へ向けて少しづつ変えていく。戦後政治も、東久邇宮内閣から幣原内閣へと大きく舵を切り、「戦後民主主義」と

後に称される改革に次々と取り組んでいくことになる。

「戦後十年」は、「戦後は終わつた」「復興にメドがついた」との自覚を促した。「経済白書」が、「もはや戦後ではない」との余りにも有名なキヤッチコピーを明らかにするのはこのわずか1年後である。

この年、政治的には「社会党の統一」「保守合同」が成り、「55年体制」がスタートを切る。前年末、復興をリードした吉田茂が

「戦後二十年」は、戦後復興の達成と国際社会への復帰を象徴する「東京オリンピック」という祭りを終えた翌年に幕を開けた。5年前の安保騒動は後方に去りゆき、岸信介政権をもつて戦前型感覚の首相は姿を消していた。吉田の愛弟子の池田勇人政権が「高度成長」を牽引しながら病氣で退陣し、同じく愛弟子の佐藤栄作政権が五輪後に成立了ばかりであった。

6年余の長期政権に終止符を打ち、鳩山一郎政権に代わったばかりだった。戦後10年にして、戦前の政友会対民政党と見まごうばかりの自由民主党対日本社会党の「二大政党制」が成立する。

しかし、そこに本来含意があつたはずの

「政権交代」は、戦前とは異なり、なぜか起らなかつた。「高度成長への助走」が始まると、戦後政治は想定外の方向へと展開していくなかつた。

その中で、佐藤は「戦後二十年」、占領下の沖縄訪問時に、「沖縄の復帰なくして戦後は終わらない」と宣言するに至るのだ。

いく。

8年近く続いた佐藤政権で、「政権交代」なき一党優位制が明確になる。そこでは自民党内の派閥の群雄割拠が進んだ。すなわち「三・角・大・福・中」と称された、自民党中央での疑似政権交代の顕在化だ。

「戦後三十年」の前年末、そのファーストランナーたる田中角栄政権が、列島改造の失敗と金脈問題で退陣し、クリーンを標榜する三木武夫政権が船出していた。2年で政権がたらい回しされる政治の始まりだった。経済が安泰で行政がしつかりしていたため、政治はパイの配分にのみ集中できたのである。他方で刑事被告人となつた田中角栄がなお権力を保持する「二重権力」状況が現れた。

「戦後四十年」は、ポスト佐藤のイス取りゲームのしんがりであつた中曾根康弘政権の長期化を決定づけた。年明け間もなく、竹下登の創政会旗揚げと田中角栄の発病による影響力低下により、中曾根首相はフリー

ンドを得たからだ。「戦後政治の総決算」をキヤツチフレーズにして、中曾根政権は、この年半ばに懸案の国鉄分割民営化にメドをつけ、電電公社、専売公社に続く民営化に成功する。対外経済政策でも、この年後半のプラザ合意で円切り上げが行われた。

そして、戦後半世紀「戦後五十年」の到来である。この2年前、自民党が下野し、非自民連立政権が誕生、55年体制にピリオドを打った。自民党的下野は、竹下派内の対立抗争を根源とするものだった。

もつとも「政権交代」はさらなる政権交代を生み、「戦後五十年」は、自民、社会、さきがけ3党連立政権の下、社会党出身の村山富市首相に担われた。しかし、あたかも自社さ政権を試すかのように、「戦後」の意味を問い合わせ事態がこの年初めに生じた。他ならぬ阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件である。戦後平和の中にあつて、自然災害と人災

とが一挙に訪れ、この国の危機管理のあり方を鋭く問うたのであった。

そして村山首相は8・15に際し、戦後50年の首相談話を発表し、過去の植民地支配と侵略について反省とおわびを表明する。

「戦後六十年」は、小泉純一郎首相の郵政解散と勝利に尽きる。人間ならば「還暦」。その祝いとともに来し方を振り返るところだが、小泉首相はそんな悠長なことを言つていられなかつた。5年余り続いた小泉内閣の総仕上げといつてよい自民党ぶつ壊しの姿がそこに明確に現れた。調整のための党内作法にかまわず、説得も妥協もしない。かくて劇場型の小泉政治は、政治や政治家のあり方を変えた。

小泉政治の後は、途中に「政権交代」を挟んで、自民党3人、民主党3人の一年一代の首相が次々に現れる前代未聞の事態を招くことになった。すでに時代は成長を求めるに

難しく、経済も行政も行き詰まつていた。いいよ政治は、パイの配分ではなく、国民負担という負の配分を強化する段階に入った。この20年来、消費税の導入と増税というテーマがそれであつた。

さらに60年以上続く戦後の果てに、東日本大震災が起こつた。3・11の空前の自然災害によって、「戦後」が終わり、「災後」が始まることが期待された。しかし、「戦後」は強固にこの国を縛り付けていた。

そして「戦後七十年」。戦後政治で吉田茂に次ぐカムバツクを果たした安倍晋三・自民公明連立政権の快進撃の中、この年を迎えた。昨年末の増税延期解散で勝利を収めた安倍首相は、アベノミクスという経済回復政策を主軸に据えながら、集団的自衛権の限定容認の閣議決定を済ませ、いよいよ憲法改正など国家の価値を問い合わせ課題に立ち向かおうとしている。祖父岸信介が埋め込んだ憲法改

正が実現可能性を帯びるのか否か、歴史認識や靖国参拝も争点化してくるのか否か。

「戦後」から同じ感覚や価値観を感じ取れない世代の台頭も始まっている。「戦後」をもう一度据え直すのか、あるいは「戦後は死なず、ただ去りゆくのみ」となるのが。……は一番、「七昔」をじっくり考えてみようではないか。

御厨貴氏 1951年生まれ。2012年から放送大学教授。専門は日本政治史。公人へのインタビューで現代史を検証・記録する「オーラル・ヒストリー」の第一人者。

御  
厨  
貴



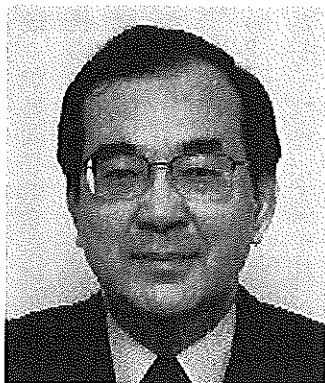
原

作品 関根常雄

歴史全体を俯瞰する意義  
昭和天皇実録

東京大学名誉教授

山内 昌之



『昭和天皇実録』が完成した。目次・凡例を含めて全61冊、1万2000ページの分量を誇る。『日本書紀』から『日本三代実録』に至る六国史の伝統を受け継ぎながら、『明治天皇紀』はじめ近代の天皇実録の叙述様式を継承した編年体史である。1990(平成2)年から編修作業に携わってきた宮内庁書陵部の労を多としたい。

二つの大戦と冷戦を経験し、二つの憲法で君主と象徴であつた昭和天皇は、年号では64年の長きにわたつて在位した。その実録は、日本史だけでなく世界史の研究でも重要な史料になるだろう。

実録は、1901(明治34)年の昭和天皇の誕生から89(昭和64)年の崩御まで87年間を記述する。凡例によれば、第一に天皇に関する事項を「ありのまま」に叙述し、第二に皇室全般や政治・社会・文化・外交についても天皇の関わりを中心に記している。

叙述にあたり、侍従日誌や内舎人日誌をはじめお手元文書などの史料3152点に依拠し、うち新発見の史料は約40点である。幼少期の手紙・作文や鼻の手術の詳細、2・26事件をめぐる重臣の動き、戦時中の伊勢神宮参拝で奏した御告文、終戦の御前会議の日時、新たな拝聴録の存在など、新事実も紹介されている。

叙述スタイルは、昭和天皇一代の歴史を扱う点で、一つの王朝について記す断代史に分類できよう。昭和天皇を「主語」とし、起こつた事を時系列に沿つて記録する編年体を採用している。編年体は、中国の『春秋』に始まり、日本書紀などの正史や『水鏡』『增鏡』が歴史を描く方法として採用したものである。トウキジデスの「ペロポネソス戦争史」も基本的に編年体といえるだろう。

一般に編年体史は、扱う史実に価値の優劣や判断をつけずに、年代順に幾らでも事象を

記述できる反面、因果関係をもつ歴史事象が年月日など時間の順序に規制され、ばらばらに裁断されて叙述されがちである。事象の間にある関連やその意味を見失い、歴史の全体像を理解できない危険性も出てくる。これは、年代記から発展した編年体史の欠点かもしれない（稻葉一郎『中国史学史の研究』）。

そこで実録は、特定の出来事について、その顛末を1か所にまとめて叙述する紀事本末体に類似した形式も併用した。紀事本末体とは、南宋の歴史家の袁枢による『通鑑紀事本末』に由来する言葉である。袁枢は、編年体史の代表作品、司馬光の『資治通鑑』の内容から共通の事象として重要な項目を、時間の隔たりと関係なく抜き出し、歴史の全体性を俯瞰できるように工夫したのである。

実録の紀事本末体で重要な一例は、宮内庁長官富田朝彦の拝謁を受けたという1988(昭和63)年4月28日の記述であろう。

これは、3日前、25日の宮内記者会の質問に、「何といつても一番いやな思い出」は第2次世界大戦だと答え、同日の実録に記載した点と関係している。

28日の実録は、天皇が富田に対し、「いやはな思い出」や、靖国神社のA級戦犯合祀と自らの参拝について述べたことを記している。

ただし、具体的な中身には触れていない。だが、「なお」という但し書きを使って、2

006（平成18）年7月20日に日本経済新聞が「富田メモ」を報道した史実に触れている。

第一は、戦前と戦後を通して昭和天皇が平和主義と国際協調を目指した人物であり、第二は帝国憲法と日本国憲法の差異にかかわらず、基本的に憲法に忠実な立憲君主あるいは象徴だった点を強調することであろう。戦後の編年記述はいずれもこの2点を軸にしている。戦前でも、皇太子時代の歐州訪問が

つまり、昭和天皇が靖国参拝について長官と会話をした史実を記録する箇所に、18年後の報道事案を合わせて記録しているのだ。実録編修者は、靖国参拝に関連する事柄を扱う場合に、単純な編年体叙述でなく、紀事本末体がふさわしいと判断したのだろう。た

だ、富田メモの内容、そこにおける天皇発言の詳細については、一切触れていない。これは昭和天皇実録の記述に際して、複数の文書や証言の支えが乏しい一史料を、重要な政治外交問題を左右しかねない独立の材料として使わないという慎重さの表れなのだろう。歴史の事象は無数にある以上、どの時代の歴史家や修史官も自らにとつて歴史的な価値や意味をもつと考えた史実を採用する。昭和の戦前と戦後にまたがる実録を成立させる枠組みは、大きく2点に収斂すると思われる。

丹念に描かれ、張作霖爆殺に関連する田中義一首相への叱責や満州事変不拡大への強い信念、天皇機関説論争への微妙な立場などが詳しく述べられている。とくに陸軍の天皇無視の記事は驚くほど多い。

昭和天皇がこの2点に基づき明治天皇を尊敬し、その治世を範とした証拠として、日米開戦の危機が迫ると御前会議で明治天皇の御製を読み上げ、平和を求めた41（昭和16）年9月6日の出来事や、開戦の詔書に戦争が自分の意志でない旨を盛り込むように希望した結果「豈朕力志ナラムヤ」と表現されたこと（同12月8日）が記載される。

戦後も、46（昭和21）年元日のいわゆる人間宣言において、昭和天皇は明治天皇の五箇条の御誓文を挿入することを希望したが、この条では、77（昭和52）年8月の記者会見の内容が紀事本末体で示される。それは、五箇条の御誓文を挿入した理由について

て回想した箇所だ。民主主義の精神は明治天皇が採用したもので、外国から輸入されたものではないという内容である。

他方、実録は、立憲君主として戦争を回避する外交努力に熱心だったと記述する。平和主義者にして立憲君主たる姿を昭和天皇に求める実録は、45（昭和20）年9月27日のマッカーサーとの第1回会見に関しても「なお」と紀事本末体を使う。すなわち天皇が戦争に伴う全責任を取ると発言したとする史料と、日本の軍人と政治家の行為にも直接に責任を取ると発言したとする史料も紹介している。

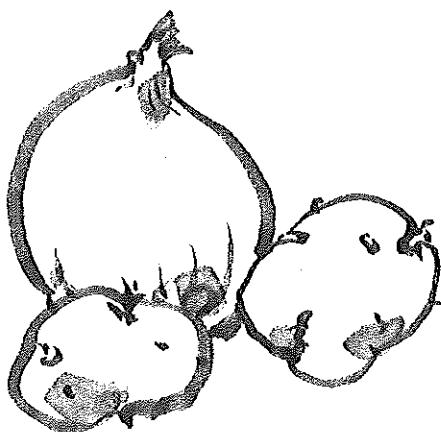
また、終戦前後にしきりに退位の意志を側近に伝えたとの記述もあるが、実録はあくまでも天皇の心中には入ろうとしない。

編年体史は、価値判断や因果関係の分析を差し挟まない点で、天皇実録の性格に適合した叙述方法なのだろう。それでも、実録の編

年記事を丹念に追えば、編修者たちが叙述で  
遠回しに語る「微婉」や、すぐには分からな  
くても読みこめばなるほどという「志晦」も  
あるのではないか。こうした予感をもつて、  
「史料集的性格を併せ持つ編纂物」（宮内  
庁）として実録を熟読するのも、個別を介し  
て普遍を学ぶ歴史の醍醐味と言うべきであ  
ろう。

山内昌之氏、1947年、札幌生まれ。力  
イロ大客員助教授、ハーバード大客員研究員、  
東大教授を経て明治大特任教授。最新著に近  
刊「歴史とは何か」（PHP研究所）。

山内 昌之



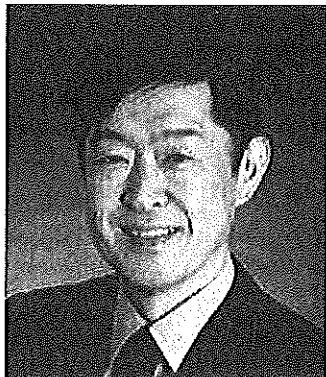
作品 関根常雄

## 憲法改正への道

国会発議の用件など議論を

国際大学学長

北岡 伸一



衆院選勝利で、安倍内閣が憲法改正に進むのではないかと危惧する人があり、また期待する人がある。論点を整理しておきたい。

そもそも國民主権の下で、國家の根本規範を作り、また作り直すのは、國民の基本的な権利であり義務である。

日本では、これまで國民の広範な議論を踏まえて憲法を作つたり、作り直したりしたことがない。大日本帝国憲法は天皇から与えられた欽定憲法だつたし、日本国憲法は連合國軍総司令部（G H Q）が草案を作り、その後若干の修正が加えられて完成したものだ。

護憲派の中には、日本国憲法はたんなる押しつけではなく、その起源には日本人の発想もあつたとか、國民は日本国憲法を歓迎したとかいう人があり、私もそう思うが、それは押しつけでないことの証拠として足りない。当局者が押しつけられたと考へれば、押しつけである。幣原内閣は、G H Q憲法草案を受

け入れなければ天皇が東京裁判に引き出されると可能性があると示唆され、受け入れた。

こうした憲法制定プロセスは、占領下に占領者が憲法を作ることを禁止した国際法に違反する。ポツダム宣言には、日本の将来の政治は日本国民の自由な決定によるとあり、これにも反する。それゆえGHQは、みずからが草案を作ったという事実を嚴重に隠したのである。

昨年の集団的自衛権の解釈見直しに対し、護憲派の人々は手続き論などから反対した。そういう人々が、こうした不適切な憲法制定手続きをなぜ不間に付すのか不思議である。繰り返せば、日本人は自分の手で憲法を作つたことも改正したことでもない。憲法改正に不可欠な国民投票法が最近までなかつたことも、政治の大きな怠慢であつた。

しかし私は、手続きが不当だから現行憲法が無効だとは考えないし、不当だから改正すべきだと思う。大きな変革期にあつて自

べきだとも考へない。その後長く憲法は定着し、日本人はこれを変えなかつたからである。

また、現行憲法の内容についてみれば、象徴天皇制、基本的人権の尊重、平和主義（憲法9条1項）、議院内閣制などは、大日本帝国憲法よりも優れていると思う。

したがつて、憲法は不都合なところを一つずつ変えていくことが望ましい。実際、国民投票も、条文ごとに審査する仕組みになつてゐる。その意味で、自民党の憲法改正草案は全面改正論であつて、実現不可能である。現在、自民党が優先的な改正項目を絞り込もうとしているのは当然である。その際、現在の改正草案をいつたん棚上げにしてはどうだらうか。

私は、憲法は一切変えてはならないという極端な護憲論と、全面的に変えるべきだという極端な改憲論を排し、稳健中道の改正を実現すべきだと思う。大きな変革期にあつて自

らのあり方を変えられないような組織は衰

退するしかない。憲法を自ら変えていくことのできない国家に、未来があるとは思えない。

周知のとおり、憲法改正のためには、まず衆参両院それぞれの総議員の3分の2以上の賛成による国会の発議と、国民投票における過半数の賛成とが必要である。しかし、現行憲法制定以来、一政党が両院で3分の2を占めたことは一度もない。全国を舞台とする

国政選挙で一政党が50%以上の得票をしたことも、過去30年間一度もない。衆院選での自民党の勝利は、小選挙区における公明党の支援によるところが大きいので、公明党が反対するような憲法改正は成立不可能であろう。では、どういう条項を改正すべきか。

まず条文が実態と乖離しているものがある。第89条は「公金」を「公の支配に属しない」教育事業等に支出してはならないとする。字義通り読めば現在の私学助成は憲法違

反である。

また、第7条の天皇の国事行為の中に「国會議員の総選挙の施行」という言葉があるが、衆院の総選挙はあっても、半数改選制の参院に総選挙はない。これはGHQ草案が一院制だったのを、日本側の反対で二院制に変更した際に修正し忘れたものである。ただ、これらは優先的な改正項目というほどでもないだろう。

第二に、もつとも論争を呼ぶものとして、第9条がある。9条1項は、国際紛争を武力で解決してはならないと定めたもので、国連憲章と同様であり、何ら改正の必要はないし、改正してはならない。ただし、この「国際紛争」とは、日本が当事者である紛争のことであって、国際紛争一般ではない。国連平和維持活動（PKO）に自衛隊が参加する際などに問題となる武器使用とは別物である。

しかし、軍隊の保持を禁止した9条2項は、

主権国家の本質に反するもので世界に例のない条項である。国民の健全な安全保障論議を妨げているので、中長期的には改正が望ましい。

第三は衆院と参院との関係である。第59条2項は、衆院で可決された法案が、参院で否決された場合、衆院の3分の2以上の多数で再可決されたとき、成立するとしている。だが3分の2以上というのはハードルが高すぎる。下院の優位は民主主義の本質である。機動的な政治運営を可能にするためにも、再可決要件を2分の1に緩和すべきだ。

ただ本当は、参院は廃止または衆院と統合して一院制にするか、あるいは選挙によらずに有識者等を任命し、権限をなくして良質の議論の場とすることが考えられる。こういう改正には参院が反対するだろうが、ぜひとも真剣に考えたいものである。

第四に、緊急事態規定がないのが、現行憲

法の大きな欠点の一つであり、われわれは東日本大震災で政府中枢の無能力を経験した。緊急事態には、基本的人権を制限する措置を講じざるを得ない場合がある。そのような例外状態を、あらかじめ想定した条文を設けておくことが望ましい。

第五に、すでに述べてきたとおり、第96条の憲法改正のハードルが高すぎるので、これを改めることである。具体的には、国会による発議要件を、現在の各院の3分の2から2分の1に緩和する案などがある。権力を制約することが立憲主義だから、改正要件を緩和することは立憲主義に反するという人がいる。これは立憲主義の誤解に基づくものである。

以上のうち、改正の必要度が高く、かつ、ある程度の可能性があるのは、59条2項、96条、緊急事態、それに環境権などの新しい権利を書き込むことであろう。世論調査や

アンケートで憲法改正に賛成ですか反対ですか、という大さっぱな質問が行われる状況では、憲法改正までの距離は遠い。自民党が本気なら、早めに優先項目を絞り、国民的議論を起こすべきだろう。

北岡伸一氏 1948年生まれ。2012年から現職。政策研究大学院大特別教授。立教大教授、東大教授、国連大使等を歴任。専門は日本政治外交史。

北  
伸  
一



作品 関根常雄

## 消費増税延期と財政

二〇一〇年度『黒字化』に照準を

東京大学教授

伊藤 元重

消費税率の引き上げ延期と衆議院解散によって、経済政策は新たなステージに入った。2年間のアベノミクスの評価と選挙後の新たな展望について議論が始まっている。ここでは財政健全化という視点で論点を整理してみたい。

\* \* \*

財政健全化については、基礎的財政収支（プライマリーバランス）の目標がある。国内総生産（GDP）比でみた赤字を2015年度までに10年度から半減させ、20年度までに黒字化を実現する。これが安倍晋三内閣のこれまで掲げてきた目標であった。

図は、7月に経済財政諮問会議に内閣府が提出した「中長期の経済財政に関する試算」にある基礎的収支の予想を示したものである。この試算の時点では、15年度目標は達

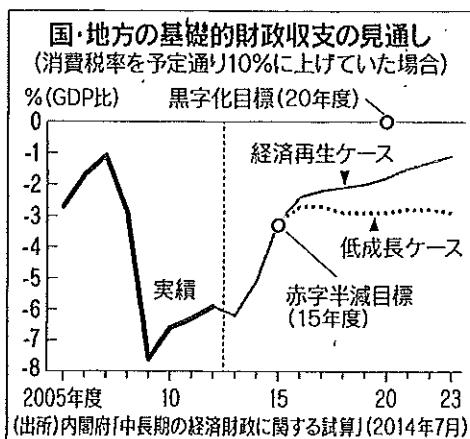


成できる見通しであった。ただ、消費税率が10%にまで引き上げられるということを前提とした試算であるので、消費税率引き上げ延期の影響を分析する必要がある。

この基礎的収支の目標は、すでに10年時点、民主党政権によって掲げられた政策でもあつた。安倍内閣はその目標を踏襲した形となつたのだ。図で分かる

よう、民主党政権時代の12年度までは赤字はほとんど縮小していなかつた。それが安倍内閣になつてから大きく改善に転じている。

この変化はデフレからの脱却と深い関係がある。デフレの下では財政健全化を実現することは非常に難しい。デフ



レの下では税収が縮小していく。それでも収支を改善しようとすれば、相当に踏み込んだ歳出削減が必要となる。しかし、景気が低迷しているデフレ状況でそれを実行することは、政治的にはきわめて難しいことであるのだ。

デフレ脱却への道筋をつけた安倍内閣は、

実は同時に財政健全化への入り口を開いたともいえる。安倍内閣発足前の12年度の財政状況は、一般会計歳入（予算段階）でみて税収42・3兆円を公債発行44・2兆円が上回るという異常事態であった。安倍内閣の最初の2年でこの事態は解消されることになる。14年度予算でみて、税収は50兆円まで伸び、公債発行は41・3兆円にとど

まっている。税収の上振れが予想されているので、決算の数字はさらに改善したものとなつているだろう。

\* \* \* \*

デフレからの脱却だけでなく、今年4月に消費税率を8%に引き上げたことの成果も大きい。消費税率の引き上げを決めたのは安倍内閣発足前の自公民3党合意であるが、税率引き上げを実行に移すうえで、安倍内閣のもとで13年に財政出動と金融緩和という2本の矢によつて徹底した経済刺激策が行われたことが大きかった。

あるエコノミストが発言していたが、「13年にあまりにも華々しく花火を打ち上げてしまつたので、14年の経済指標が悪くみえすぎる結果になつた。アベノミクスへの過剰な期待が「自分はその恩恵を受けていない」

という失望につながつてゐる。7~9月期のGDP速報値が想定されていた以上に悪かつたことも、そうした失望感を強めさせる結果になつた。

ただ、13年の1~9月の平均と比べて、14年の1~9月の平均のほうが、GDPの水準は高くなつてゐるのも事実だ。決してマイナス成長になつてゐるわけではない。足元の経済状況を冷静に見れば、来年以降の経済に明るい見通しが持てるような材料がないわけではない。

現在の日本経済は非常にバランスの悪い状態にある。企業業績は過去最高水準である。それでもかかわらず、投資が思うように伸びてこない。雇用は完全雇用に近いし、雇用者報酬の伸びは過去17年で最高である。それでも物価上昇に賃金上昇が追いつかず、実質賃金は低下を続けてゐる。

しかしこれも、消費税率を引き上げたとい

う一時的要因によるところが大きく、近いうちに賃金上昇が物価上昇に追いつくことも期待される。

企業業績と雇用の堅調をいかに消費や投資の増加に結び付けるのか。これが当面の日本経済を活性化させるための重要なポイントとなる。多くの専門家が選挙後に成長戦略を加速させることの重要性を指摘している。その通りだと思う。また、企業業績の好調が、賃金上昇につながるような流れをつくつていいくこともその効果は大きいだろう。

\* \* \*

さて、そうしたなかで選挙後の財政健全化の戦略はどのようにあるべきだろうか。

ここで 15 年度目標と 20 年度目標への対応が注目されることになる。税率引き上げ延期で、15 年度目標の達成の雲行きが怪しく

くなってきた。それでも歳出の見直しや税収の上振れで実現できる可能性がないわけではない。ただ、重要性は、15 年度目標よりも 20 年度目標のほうに移ってきているのではないだろうか。

これは 10 年 6 月の民主党政権の時代に設定した目標である。それから 4 年以上たつており、当時からみた 15 年度までの射程は、現在でいえば 15 年度よりも 20 年度のほうに近づきつつある。政策目標としても、赤字半減よりは黒字化の方が重要な目標である。

図にもあるように、今年の 7 月の試算によれば、アベノミクスの成長シナリオに乗つていたとしても、20 年度の段階でまだ GDP 比で 1・8% 程度の赤字が残つてしまふ。成長が続ければ相当な税収増が期待できる。それでも急速な少子高齢化による社会保障費の増大をカバーすることは難しい。それがこの

図のメッセージである。

このメッセージはどのように理解されたいたのだろうか。私は次のように考えていて、当面は15年度まで赤字半減の確実な達成を目指す。そのうえで、さらなる社会保障改革などの歳出見直しの議論を急ぎ、必要があれば追加増税の議論をする。

これが、今回の引き上げ延期によつて次のような解釈に変更されるべきではないかと考えている。20年度の黒字化目標の実現のための道筋をより具体化すべきである。そのためにも、社会保障改革を柱にした歳出見直しを早急に進めていく。15年度目標の旗を降ろす必要はないが、20年度目標への取り組みを具体化する重要性のほうが大きい。

17年4月には、消費税率が10%に上がる。税率引き上げ延期による税収減は厳しいが、20年度の目標には延期の影響はない。基礎的財政収支は国債費を除いた歳入と歳

出の差があるので、その時点では消費税率が上がつていれば、延期は関係ないのだ。

財政健全化のためには、歳出の徹底した見直し、デフレ脱却と成長による安定的な税収拡大、そして増税による税収の確保、この3つのどれも欠かすことができない。消費税率の引き上げは延期されたが、17年の税率再引き上げに際しては景気条項を付さないということなので、その時点で確実に税率引き上げをしてほしい。そのうえで、歳出見直しをさらに強化することが求められるのだ。

引き上げ延期により、消費税率2%の1年半分で、8兆円前後となる税収の損失は痛い。ただ、毎年1兆円規模で膨れ上がりしていく社会保障費の異常な伸びにどう対応するのかという問題のほうがもっと大きい。

今回は、税率引き上げ延期によつてすぐに国債金利が急騰するという見方をする人は少ない。日銀が大量に国債を購入しているか

らだ。国債市場からの圧力を止めているとい  
うことが日銀の本意であるとは思わないが、  
結果的に政府の財政健全化シナリオにある  
程度の時間的な余裕を与えていることも事  
実だ。選挙後、歳出抑制効果が出るような社  
会保障改革の本格的な議論が始まることを  
期待したい。

いとう・もとしげ 51年生まれ。ロヂ  
エスター大博士。専門は国際経済

御　厚　元　重



作品 関根常雄

对中国、けん制・説得の両面で  
歴史認識は対話継続を

東京大学准教授

川島 真

昨年末の衆院選を受け安倍晋三政権には2018年まで続く長期政権の道が開けた。近年の短期政権は長期的な課題に取り組めず、支持率を強く意識した政策しかとりえなかつたが、様々な外交上の懸案に取り組む希少な機会が到来したといえる。本稿はこの機に進展が期待される懸案について5つの提言を試みる。

\* \* \* \*



第一の提言は外交政策の地ならしをすべく、国際広報を従来以上に重視することである。一部の国の宣伝活動もあり、安倍政権が憲法改正を目指し、歴史認識にも修正を加えようとする右傾化政権であり、衆院選の結果は日本社会の右傾化を示すという認識が世界の一部に広がっている。

これに対し、安倍政権はあくまでも普遍的

価値を重視し、歴史認識問題に適切に対応できることを明確に示すことが求められる。

その際、特に重要なのが、①相手国の日本認識や東アジア認識も踏まえ、きめ細やかな広報を開拓する②統一見解にこだわらず一定の幅のなかで日本国内の多様な声を伝えたほうが民主主義国家として信用を得られる③ネガティブキャンペーンをはる国との主張への対抗・修正も重視しつつ、それだけでではなく、たとえば課題先進国たる日本のありのままの姿を包括的に示すような形で広報内容を練り上げる——という3点である。

国際広報を含め、15年の焦点は歴史認識問題である。第二の提言は、この問題で明確なメッセージを世界に伝えることである。また戦後賠償やアジア女性基金といった戦後の日本の取り組みや、中国の温家宝前首相、韓国の金大中元大統領の日本のこの問題へ

の取り組みに対する高い評価などを踏まえる必要がある。

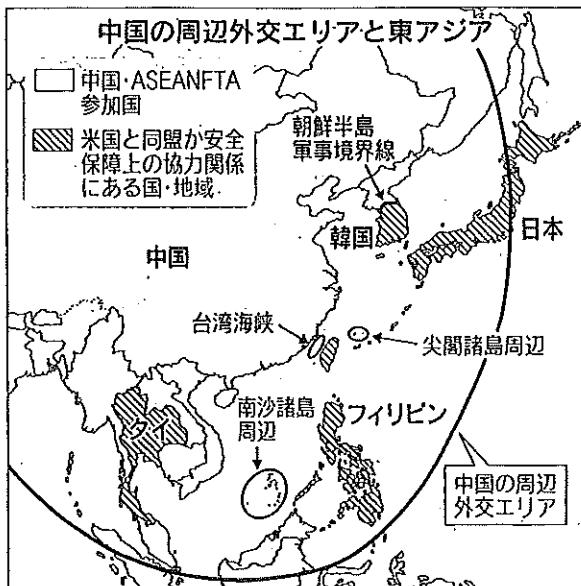
次に敗戦国としての日本がいかに戦勝国や植民地だった地域との間で「和解」を進めできたのかという足跡を世界に示すべきであろう。米国、オーストラリアなどの同盟国やアジア諸国との間、とりわけ日米間の首脳会談などの機会に、「和解」が成し遂げられてきた事案が象徴的に表現されることを期待したい。

なお、慰安婦問題は、誤解について反論するには当然としても、人権問題として世界から注目されていることに留意すべきだ。少なくとも普遍的価値を重視する立場から、一步踏み込んで世界からの理解を得ることが望ましい。

\* \* \* \*

中国や韓国との「和解」については長期的

な視野にたって考るべきである。日本としての立場はもちろんあるが、相手側にも主張があり、まずは対話が求められる。



資料の世界記憶遺産登録を申請するなど、中韓は自らの立場が普遍的だとみなし、歴史や領土を巡る対外広報に熱心である。15年は戦後70周年と同時に、日韓基本条約締結50周年に当たる。中韓は一層、日本への批判を内外で展開するであろう。

そこで第三の提言だが、日本はまず国際的な舞台でこれらに適切に対処しつつ、同時に中韓との和解にも真剣に取り組んでいる姿勢を示す必要がある。実際、双方が主張を繰り返すだけであろうと「対話」を継続すれば、和解に向けた努力の表現になる。実質的に進展がなくとも、決して無駄ではないのである。

現在の日本外交にとって主戦場の一つは東南アジアである。中国は米中関係を「新型の大國間関係」と表現する。主権・安全保障・経済発展といった「核心的利益」を相互に尊

重し合うパートナーシップだという立場だ。地球規模の課題には米国と協力しつつも、主権と安全保障問題が強く表れる周辺領域、つまり東アジアや中央アジアでは自らの立場を尊重するよう米国に求める、ということである。

無論、南シナ海の問題にみられるように、米国のリバランス政策は一面で中国との協調を、もう一面で同盟国との関係強化を唱えるので、米国がそうした地域での中国の主権や安全保障に関わる「核心的利益」について妥協するわけではない。しかし、習近平政権は自らの周辺地域での「主導権」を得ようとする姿勢を明確にしている。

その象徴が、アジアの安全保障はアジア人が担い、そのアジアでは中国が主導権を持つと明言した「アジア安全保障観」などにみられるように、これまで日本が多く語ってきた「アジア」を中国が積極的に語り始めたこと

である。さらにアジainフラ投資銀行（AIB）にみられるように、具体的なガバナンス（統治）や、制度づくりにも踏み出している。

日本として、こうした動きにどう対処するのか。日本は日米同盟、また豪州や韓国などの同盟国との面的関係の構築、さらにそのための国内法制の整備を重視すべきであり、そうしてこそ中国を軍事安全保障面でけん制できる。

だが、これは第四の提言だが、日本は中国が形成しようとする地域的な枠組みや制度にただ批判的であるだけでなく、ときには懐に入つて、他の東アジア諸国とともに中国にコミット（関与）しつつも、中国が国際的なルールに従うよう促していくべきだ。

中国との対話でまず必要なのは、可能な限り言葉の意味をそろえ、ゲームのルールを共有することである。そうしなければ価値やコ

スト認識の共有も難しいだろう。A I I Bについても議論もあるが、アジア開発銀行とのデマケーション（役割分担）案などは日本側で準備し、日本がルールづくりに食い込む選択肢もあつたのではないか。

\* \* \* \*

最後に、安倍政権が長期政権だからこそ期待する点を述べて第五の提言としたい。

戦後70年を経て、戦後初期に東アジアに形成され、冷戦崩壊以後も維持された朝鮮半島と台湾海峡に引かれた分断線が目下、中国の台頭とともに揺らぎ始めていることに注目したい。北朝鮮問題にしても中台問題にしても、これらの「東アジアの冷戦」の基礎があつたラインが次第に揺らいでいることの表れである。

日本は朝鮮半島や台湾海峡がどんな状態

であることが望ましいのか、あるいは望ましくないのかを明確にし、常に最悪の事態を防ぐために努力すべきである。北朝鮮との関係づくりは、戦後外交の使命である植民地支配の総決算という意味でも、また拉致問題、ひいては朝鮮半島の将来を考えるうえで重要なである。

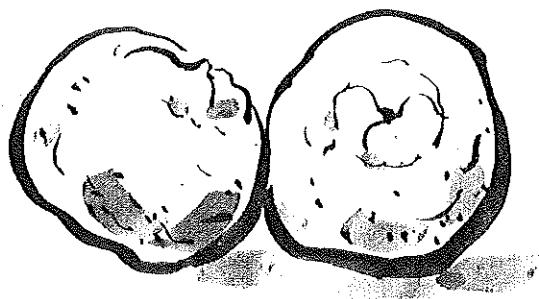
また、何よりも台湾との関係を重視することが求められる。台湾とは国交はないが、既にいわゆる漁業協定や投資協定など、多くの経済文化交流面での枠組みが形成されている。今後は懸案の自由貿易協定（F T A）締結が視野に入ろうし、軍事安全保障面でも一定の対話が必要だろう。

このほか、北方領土問題など、歴史認識問題と深く関わり、日本の近隣諸国との関係を妨げる長期的な課題群を一つでも解決できれば、日本の将来にとつて大きな布石になろう。15年の安倍外交には、こうした長期的

な視野にたつた、時間的な意味での「俯瞰（ふかん）する外交」を展開してほしいものである。

かわしま・しん 68年生まれ。東大博士（文学）。専門はアジア政治外交史

川島直



作品 関根常雄

## ニッポンの革新力

日本経済新聞 共同特集

### 実る技術産業の厚みから

前回の東京五輪は新幹線をはじめ日本の誇る技術を世界に発信する見本市でもあつたが、それから半世紀。2回目の東京五輪を6年後に控え、今度はどんな技術やイノベーションが世界に飛び出すのだろうか。

まず注目したいのは、東海旅客鉄道（JR東海）が2027年に東京（品川）ー名古屋間の開通をめざす超電導リニア新幹線だ。時速500キロと新幹線の約2倍の速度で、東名間を40分で結ぶ。かつては独シーメンスも超電導リニアの開発に取り組んだが、途中で断念し、今日まで続けたのは日本だけだ。過去26年、リニアの開発一筋でやつてきたJR東海の寺井元昭リニア開発副本部長

には忘れない光景がある。リニアの実験設備が今の山梨ではなく、宮崎にあつた1990年ころ、開発陣は「クエンチ」と呼ばれる謎の現象に悩まされた。何の前触れもなくある瞬間に超電導磁石の磁力が消えて、車体の推力や浮揚力が失われるのだ。

宮崎には見学者が大勢やつてきたが、クエンチによる不具合で走行試験はしばしば止になる。「遠くから足を運んでもらつたのに、走る姿をお見せできない。そんな時は本当に情けなかった」という。悔しい思いをバネに、その後、開発陣はクエンチの原因が磁石の温度変化にあることを突き止め、対策を講じた。リニアが実用化に大きく近づいた瞬間だった。

実はリニアは日本の産業界の層の厚みの象徴でもある。開発を指揮するのはJR東海だが、その下で起電導コイルをつくる重電メカーや車両会社、さらに特殊な金属材料に

強い素材会社まで100社前後の企業が協力して、技術開発を支えた。

「日本の高密度の産業集積があつてはじめてリニアを実用化できた。他の国はなかなかマネができるのではないのでは」と寺井副本部長はいう。

リニアに限らず、日本から世界に羽ばたくと期待される技術は多い。トヨタ自動車が今月発売する燃料電池自動車（FCV）の「ミライ」。究極のエコカーと呼ばれるFCVは水素インフラの整備が普及の前提であり、本格的に浸透するには10年単位の年月が必要だろうが、トヨタの見据える時間軸は長い。

「今年入った新入社員が部長になるころに主力商品になつていればいい。そのための布石」とある幹部はいう。

「必要は発明の母」という言葉があるが、高齢化や人手不足といった日本の諸課題もイノベーションを生み出すバネになる。建設

機械メーカーのコマツにとつて今期待の星の技術はICT（情報通信技術）だ。建機といえど、ブルドーザーなど油くさいイメージが強いが、それがICTと結びつくことで驚くような革新が生まれる。

今同社の郡山工場では工場裏手の広大な空き地で除染作業が始まっているが、その主役がICT。除染に携わるブルドーザーには「情報化施工」と呼ばれる仕掛けが施されていて、人のする仕事は車を前後に動かすことだけ。肝心のブルドーザーのブレード（刃先）操作は事前に入力した3次元データにそつて自動的に制御され、思い通りに整地や土壤の削り取りができる。

作業精度はベテランオペレーターをしのぎ、幅150㍍の土地にわずか50㌢の傾斜をつけることも可能。これによつて水はけがよくなるなど様々なメリットが生まれる。

ここに紹介したのは、日本企業の実力のほ

んの一部だ。米調査会社のトムソン・ロイターが保有する特許の質などに注目して世界で最も革新的な企業100社を選ぶ『Top 100 グローバル・イノベーター』では、日本企業が今年39社選ばれ、米国企業を抜き国別でトップに立った。

だが、日本に残された課題も多い。一つは技術力があつても収益や市場創造につなげるためには構想力やマーケティング力、ブランド力が欠かせず、こうした領域では欧米企業に比べて、劣後することが多い。日本はスマートフォンに必要な要素技術がほとんどすべてそろつっていたが、ステイティブ・ジョブズ氏（米アップル創業者）の「こんなモノがあつたらすごい」というひらめきや発想力に欠けた。

もう一つの日本の弱点は人の流動性の低

さだ。近年ノーベル賞受賞者を多く輩出して注目される名古屋大学の浜口道成総長は、

「名大は歴史が浅いこともあって、他の旧帝大に比べると、教授陣における他大学の出身者比率が非常に高い。それが成果に結びついている」という。大学か企業か問わず、外国人を含めた多様な人材の相互の刺激がイノベーションの生産性を上げる近道である。

（編集委員 西條郁夫）

### 产学の分担 新たな形を

青色発光ダイオード（LED）を発明し、実用化した3人の科学者がノーベル物理学賞に選ばれたことは日本の科学界や産業界にとり朗報だった。青色LEDは大学での基礎的な研究が企業による製品化に結びついた、まさにイノベーションのモデルケースだといえるからだ。

大学の研究能力を生かして企業が革新的な製品を生み出す。こうした産学連携を日本

政府は強く後押ししてきた。

科学技術政策の基本方針を決める政府の総合科学技術・イノベーション会議（C S T I）は今年度から「革新的研究開発プログラム（I m P A C T）」を発足させた。災害救助用ロボットなど12テーマを選び、产学から人材を集めめた。成功すれば社会に大きなインパクト（影響）をもたらす研究課題に、成否を厳しく問わず資金を供給する。

来年4月には日本医療研究開発機構（A M E D）が誕生する。製薬や医療機器開発を支援する政府機関で、文部科学省など複数官庁が個別に出していた生命科学関連の研究予算を集約して扱う。米国ではベンチャーエンタープライズを見つけ製薬大手が製品に育てるが、日本はベンチャー企業が未成熟だ。大学のシーズをもとに創薬のイノベーションを目指す狙いだ。

ただ、1970年代～80年代当時と今で

は日本の产学研連携の内実は異なる。

80年代半ばに赤崎勇と天野浩の両氏が名古屋大学で青色LEDの基礎技術の開発に成功した時は、実用化を狙う豊田合成と共同研究が発足。文科省傘下の科学技術振興機構（J S T）がこれを支援した。日亜化学工業の中村修二氏（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）はこれとは別個に高輝度青色LEDの量産化法を編み出した。

日本経済の成長期、研究者は大学などから得る研究費とは別に产学研連携で追加的な研究費を得ることが多かった。しかし今は日本の財政の制約から、研究費獲得は「ゼロサムゲーム」の傾向が強い。

政府は社会や産業への成果還元が明確な「出口志向」の強い研究を重視し、国立大学の予算配分を誘導する。産業界や社会からニーズが高いとされる研究には多額の研究費がつく一方で、そうではないと見なされた研

究は圧迫を受けやすい。結果、研究費が欲しければ研究者は出口志向にならざるを得ない。

戦略分野への集中投資は財政制約からやむを得ない面もあるが、半面、副作用も生む。「右顧左顧する研究者が増えた」と安西祐一郎・日本学術振興会理事長（元慶應義塾塾長）は話す。研究費を得やすい内容に研究テーマを変える傾向が目立つという。

赤崎氏らは自らの信念にこだわり研究をなし遂げた。研究者が探究心や使命感を見失つては真に革新的な成果を出せるか心もどなくなくなる。科学が根元から揺らぎかねない。金とのバランスを見直す必要がある」と話す。基礎研究から応用研究、実用化という単線的な見方ではイノベーションの創出はできないとの指摘もある。和田昭允・東京大学名誉教授は「自然や社会の本質を解き明かそうとする純正な研究と、具体的な問題解決に結する応用研究」という区別を示す。

素粒子物理学など自然の本質を極める研究からイノベーションの種が飛び出ることもあれば、個別問題の解決が汎用的な事実の解明につながることもある。基礎的な研究をどう再活性化させるか。CSTIは2016年から5カ年の次期（第5次）科学技術基本計画づくりの議論を始めたが、従来の型にはまらない政策づくり、产学の役割分担の形を考えていくことが大事だ。

（編集委員 滝順二）

感を抱く科学者は多い。CSTIの久間和生議員（元三菱電機副社長）も、「トップダウントンの競争的な研究資金とボトムアップの資

## わが回想記

早稲田大学名誉教授

堀江 忠男

### 石油の国の悲劇

ある日突然に一リットル百三十五円のガソリンが二百円に、一区間百五十円のバスも二百円に値上げになつたら、東京、大阪その他全国のめぼしい都市で大規模な抗議デモが起ころう。

それを受けたペレス大統領がガソリン九〇%、バス代三〇%値上げなど一連の引き締め策を実施に移したのが先月二十七日。即日、全国各地で騒乱が起きた。

しかし、デモ隊の中の過激派対警官・軍隊の銃撃戦、死者三百人、負傷者千人、商店街の略奪、放火、戒厳令施行とまではなるまい。だが先月末から今月初めにかけて、こういうことがある国で現実に起つた。南米最北端のベネズエラでのことだ。三百三十億ドルの对外債務を抱え、利払いと貿易赤字で二月依存国家になつてしまつてゐる。

だから一九七〇年代のオイル・ショックはこの国を急速に富ませた。七〇年代初期に一人当たりG.N.P.（国民総生産）約二千ドルだったのが、八一年には四千ドルを超えた。ところがその後の原油価格下落でいまは約三千ドル。浮沈のはなはだしい経済である。

ベネズエラの歴代政府も石油一辺倒の不

安定を意識して、工業・農業開発に努力して

はきた。しかし主要工業は外貨におさえられ、農業は少数の大地主が投機的な換金作物を栽培しているという状態からいまだに脱けだせない。

ただ、政治は一九五八年に軍政を打倒して以来、民主政治が続いているので、ペレス大統領も、引き締め政策をきっかけに起こった「信じられない悲劇」（同大統領の言葉）をなんとか乗り切って、国際収支の改善と国内経済の民主的再建に進みたいという決意を表明している。

I.M.F.のみならず、米国、スペインがすでに援助供与を約束したし、西ドイツ、日本の援助も実現するようだ。それでベネズエラが立ち直って、石油だけに頼らないですむ安定的な自由国家への道を進んでほしいものである。

(89・3・11)

#### お伊勢詣りと日本人の宗教観

春休みを利用して伊勢・志摩をまわってきた。皇大神宮（内宮）も豊受大神宮（外宮）も、心の洗われるようなすがすがしさであった。ただ、昔は杉林がもつとうつそうと生い茂っていた。昭和三十四年の伊勢湾台風で老木がたくさん倒れたのだそうである。神宮御園で野菜、果物をつくり、御塩殿で塩をつくり、忌火屋殿では木と木をすり合せて火を起こす。御饌殿では朝夕一度、天照

大神おおみかみをはじめ神々にお食事をお供えする。

日本の神様は、西洋の神様とちがつて、人間とのつながりが深い。「旧約聖書」によれば、まず神が存在し、その声によつて、天地、太陽、月、星、動植物、人間ができたとされている。「古事記」では原始の混沌もんこんのなかから葦の芽のようなものが成り、それが神様と化した。その末裔が天照大神あまのみこと、その弟が素戔鳴尊すさみのむちゆきであり、この尊になると八岐大蛇退治など人間的要素がぐつと強くなる。

神道のもう一つの特徴は、他の宗教・思想を潔癖に排除しないことだ。仏教との関係では、神仏混交が多かれ少なかれ行われてきた。

証寺これが天照大神を守る鬼門の固めの役割をになつてゐる。江戸時代には儒教と神道の合まとわり一化を図る思想もでた。

本居宣長は仏教的・儒教的解釈を排した「復古神道」の主唱者であるが、神の御旨か

らすべてを割りだしたわけではない。「玉勝間」には「真心とはよくもあしくも生まれつきたるままの心」という一節がある。現代ふうにいえば、自然主義である。また、弟子たちに、私より良い考えがでたら、私の学説にこだわるな、と説く自由主義者でもあつた。

異なる思想、信条、制度の国々が一つの自由で平和な世界共同体をめざしはじめた今、日本人のおおらかな宗教観・思想的態度は、その過程に積極的な貢献をなしうるだろう、と私は信じている。

(89・4・8)

### 土佐自由民権と現代

「板垣死すとも自由は死せず」。土佐で一九八一（明治十四）年に結成された自由党の総理、板垣退助が翌年、岐阜県で遊説中、暴漢に刺されたときの言葉である。

土佐の自由民権運動について私の知つてゐるのはこの名文句くらいなものだったが、こんど高知市で開かれた全国公立短大協会総会に出席し、高知短大の外崎光広名誉教授の講演を感銘深く聴いた。その要点を紹介したい。

自由民権運動の出発点になつたのは一八七四（明治七）年の「民選議院設立建白書」であるが、起草者八人のうち、四人が土佐人であった。

同年、高知に設立された立志社は、初めて「民会」を開き、三年後には県内全域に小区会・大区会を組織して、地方自治組織をつくりあげた。それを積み上げて国会を実現するのが目標であつた。それからさらに二年後、一八八〇（明治十三）年には、土佐郡上町々会が、県令（知事の旧称）を押しきつて、婦人選挙権と被選挙権を実現させている。

明治政府は自由民権運動にはげしい弾圧

を加え、運動家の投獄、罰金、言論機関の発行禁止などが相次いだ。一八八二（明治十五）年、発禁処分を受けた「高知新聞」社は、高知新聞葬を挙行して、その「靈」をとむらつた。会葬者は五千人近くに及んだ。

その前年には立志社の植木枝盛と北川貞彦が日本国憲法草案を起草している。それを現行憲法と対比してみると、思想、信教、学問、言論、出版その他の自由、法律の定める手続きによらなければ逮捕、拘禁などされないという人権擁護条項など、みな先駆的に明示されている。

植木、北川らの草案は、戦後の憲法研究会の「憲法草案要綱」（起草者、鈴木安蔵）作成に活用され、この「要綱」がG H Q（連合国総司令部）草案に大幅に採り入れられた。こういう経過をたどつて、いつたん埋没させられた彼らの志が、戦後の憲法のなかに再生したのである。

## 「被ばくピアノ①」

ランコ岩本  
(米国ジャーナリスト)

現代日本の若者たちに関して私の耳に入つてくる情報は、やる気喪失の「もやし」の様にか弱いとか、「引きこもり」、家族へ(そして教師にも)暴力をふるう、あげくの「親殺し」・・・など、日本の将来を懸念するものばかり。

ニューヨーク生活の長い私は、それらの情報を鵜呑みにはしない。現代日本の世相のほんの一面、と信じている。アメリカン・ドリームを胸に、この「ヒューマン・ジャングル」ニューヨークにやって来て、果敢に戦っている日本の若者たちが少なくない事実を知っているからだろう。その数は年毎に確実に増えていて、悲観的情報で気が

重くなりかけた私を元気づけてくれている。日本から、ここでやりたい、と色んなイベントを企画実施する市民グループも近年増えてきた。

これも、そういったイベントの一つ。半年ほど前に織田文雄氏(90歳)から、「国連平和デーに被爆ピアノのコンサートを企画していますから、よろしく」と連絡があった。彼は私が初めて1993年に中国に行つた時の「親善」訪中グループの団長。被爆ピアノ企画の中心人物(ピアニストの長谷川香織さん)もその後彼の親善訪中旅行に初参加したことで、彼の頭の中でこれは「縁だ」となったわけだ。

その後、8月4日の比叡山での世界宗教サミット開催の前夜祭で、延暦寺の大講堂でチャリティー・コンサートを終えた直後電話連絡があり、長谷川さんとひと言お話しする機会に恵まれたものの、具体的には「ま

た後で」。NY行きの資金繰り、ピアノの

運送費捻出などで、国内あちこちでチャリティーコンサートを実施中で、超忙しの模様。走りながら、ひたすら目的達成に向けて、次々と立ち現れるハードルを乗り越えてつある様子が伝わってきて、これは私が生きて来たやり方そのものを実施中のグルーピングらしい、と途端に親近感が湧いた次第。

この私の予感はばつちり当たつていた。

やつて来たといふか、被爆ピアノと共に「無事ニューヨークにたどり着いた」グルーピングのメンバーたちは、ここ現地でもあれこれ発生したハードルを見事乗り越え、見事にスケジュールをこなし、大成功。

お別れのレセプションで、実行委員会の

委員長を務めた神戸市の写真家、梶田誠さんから、成り行きの裏話を聞いた私は抱腹。しかし「成せば成る」もの、と感動した。

## 「被ばくピアノ②」

」の件の裏話的コトを書く何よりの理由は、「やる気」さえあれば、そして「そうなる様に定められているなら」(If it's meant to be) の何よりの実例と思うので。

「国連平和デー」出演前日の9月16日にニューヨークに到着したグルーピングは、慣れない土地で、先ず色々なハードルを乗り越えるハメとなつた。これは全てが終つてから、実行委員長の梶田誠さんやピアニストの長谷川香織さんたちが話してくれたこと。来米したのは出演する立命館宇治高校生や私立洛南高校生らのグリークラブのメンバーと、彼らの家族や友人たち、そして企画担当関連者たち。

NYに着くやいなや145丁目のバブティスト教会でのリハーサルに慣れない地下鉄で行つたものの、練習場所の変更で、豪

雨の中を25丁目の日米合同教会に移動となつた。受験で多忙な学生たちの「参加許可」が学校側から出たのは、9月の初めだつたという。だからリハーサルはとても大事。中には梶田さんに「宿題を手伝つて」という学生もいた、と梶田さんは苦笑した・・・が、相互に楽しい思い出となつたのは確かだろう。

合間を縫つて、家で待機していた私に、長谷川さんから電話連絡。「予定変更のホテルの電話が通じない」ので、公衆電話から、という。通話期間3分?が切れると新たにコイン(貨幣)を入れねばならない。彼女がコインを持ち合わせているかどうかも知らない私は慌てて、会話のテンポが速くなつた。「明日はバスがなければ国連に入れません」(だから全員は入れないし、岩本さんも入れないらしい)と長谷川さん、「何とかなるでしょう。ともかく行つてみ

ます。目印に赤のジャケットを着て行きます」と私。相互に会つたことが無いから「見え付け易い」様に、と。

気もそぞろで8時に国連に行つたら、エントランスのゲートは閉まつていて、既に数十人が列を作つていて、更に付近に数十人のグループが見える。私も列に並び、長谷川さんに見付けて貰うこととした。数分後、予定通り「岩本さん・・・では?」と長谷川さん。心底、ほつとした瞬間だつた。後で彼女から「岩本さんをお見かけしたときは、本当に後光がさしていました」とのEメール。私は朝日を背景にしていたから「後光」の印象となつたのだろうが、彼女がどれほど、日本から来てくれたメンバー全員を国連の中に連れて行きたかったか、自分が入るのは、どうしてもイヤ、とハラハラドキドキしていたか、が如実に伝わってくる文章だった。

8時半頃、それと解る女性の国連職員が、「さあ、00グループの皆さんは・・・」

とやり出した。平和デーの公式行事として

開かれた学生会議出席の為、N.Y.、マサチューセッツ、ペンシルバニア、カナダ、メキシコからやって来た学生たち（500人以上と聞く）に、彼女は「さあ、さあ・・・」と声を張り上げている。ゲートは開かれ、

「入るチャンス！」と、長谷川さんに目配せして、私達は彼女の差し伸ばした腕の下をくぐる感じで、無事全員ゲート内に入る

ことに成功！

女性職員に「？」という感じで見つめられたとき、私は澄まして「出演者です！」とやつて、彼女の傍で日本から来た人達に、「さあ、こっち！早く、早く！」とやつて、心理的にすっかりグループの一員になりきつて、コトの成り行きを楽しんでいた。

イベントは、それが会議であれ、スポーツであれ、祭典であれ、開会して無事成功裡に終らせるまでには、言い尽くせぬ関係者の努力がある。被爆ピアノの「国連平和デー」出演プロジェクトもその例に洩れなかつた。

日本国内で資金調達のチャリティー・コンサートを開催中、「ニューヨークでやるなら、『国連で』やれればいいなあ」という想いというか夢が誕生。瞬く間に「やれればいいなあ」は「やろう！」と展開。それで日本のアメリカ大使館に「やりたい」と申請したという。そしたら、「国連にコネがありますか？」と訊かれたそうだ。なければ無理ということ。八方手を尽くして探しした結果、コネがあるという古川千佐子

「被ばくピアノ③」

氏（元オペラ歌手で声学家）の登場となつた・・・。詳しい成り行きは聞きそびれたが、古川氏の努力で「国連平和デー」出演が可能となつたと聞く。誠に「成せば成る」の見事な実例というべきだろう。

こうして9月17の朝、国連本部のローズ・ガーデンで潘基文（Ban Ki Moon）国連事務総長が「平和の鐘」を打ち鳴らし、被爆ピアノ参加の世界平和を祈る式典が開会。「平和の鐘」は、60カ国の子供たちが集めた硬貨で鋳造され、日本政府から国連に寄贈されたもの。

式典には潘事務総長はじめバイオリニストの五嶋みどり、キム・ヨナ（フィギュアスケート5輪金メダリスト）、エリ・ビーゼル（ボロコースト体験談を書いて1986年ノーベル平和賞受賞）各氏が参加し、式典の模様は逐一テレビやネットで世界中に放映された。潘事務総長の「被爆ピアノの演

奏に感動しました」の言葉も世界に伝えられたわけである。彼はまた、自宅に贈られた千羽鶴を飾つてることにも言及した。

世界の人々にとつて、折り鶴は今や「平和のシンボル」となりつつある。広島の被爆ピアノに折り鶴のネットクレースが幾つも掛けられていた。式典前、ひつそりした会場で、来し方を思いやつて、「大変だつたわねえ・・・」と被爆ピアノを撫ぜた途端、私は涙がこみ上げて止まらなくなつた。

被爆し、今度はここに来る為国内でコンサート活動し、やつとたどり着いたピアノ。そして人々が想いを込めて折つた鶴・・・。そういえば、私が1956年に横浜から貨物船でアメリカに留学の旅に出た時、両親はじめて多くの見送りの人達も、私の為に鶴を折ってくれた・・・。

昭 経 俳 壇

三 郎

悟 風

それならと小春日和の陸奥の旅

山笑ふ無人で廻る観覧車

ひひらぎやイエスのふるゝ白き指

山笑ふ小山寺にある販売機

売れ残る羽子板もあり年の市

なんとなく夫婦別姓山笑ふ

冬銀河の旅路を汽車に乗り

信号は手をつなぎ行く新入生

獅子舞のまなこやさしや嫁の舞ふ

丸の内も八重洲口にも春の風

春眠のうつろに覚める睡魔かな

唐紙に夕陽いろどる錦かな

春眠の門のなき姿かな

蟬のごと墜落をする奴凧

コーランの祈りカスバの夕長し

ぶらんこやうれしき悲鳴笛に飛ぶ

京子

対岸も此岸も花の遊歩道

日脚のぶただそれだけの嬉しさよ

列島を桜咲き継ぎみちのくへ

草に木に老ひに若きに日脚のぶ

剣太郎

散髪の剃りあと青き余寒かな

初晴れや日本へサハラの石油基地

逢ふ程にうれし春風のような人

稻植える女らイスラム服を着て

家ごとに引く流れあり露の臺

サハラかな隊商宿の蜃氣楼

ウインンドに淡色ドレス春隣

寒明けのサハラらくだに身をゆだね

陽炎やヒッチハイクのイスラム女

モロッコや地の果までも花菜晴

草青み青みて空のやはらけき

H. ドッペル  
フェルト

山人

買い味噌は恥とも云ひて作る母

燈台の暗きともしや冬銀河

仮寝して若き尼僧の煤籠

本邦を二つに分けて冬日和

年明けの茜の空や桜島

どんぐり

年輪のしるき母の手藁を編む

祖母ひとり母屋に籠り藁仕事

耕して畦黒ぐろと冬の月

火うつりの早し枯葉の畑みよが

花盛り指折り数ふ花の房  
桜咲きいかに居わすか友は今  
桜散る美女薄命の想いかな

多摩川に線路に蛇行す古車輛  
早春の希望を乗せけり廢炉線  
蠟梅は乱れて咲きぬ秩父路を  
曇り空富嶽かくれて氣の重さ

庭先の紅梅映ゆる富士の山  
蠟梅は乱れて咲きぬ秩父路を  
蠟梅は乱れて咲きぬ秩父路を  
蠟梅は乱れて咲きぬ秩父路を

罠抜けし狐は裏の鶏小屋へ

富貴男

長谷川

今朝の雪の五重の塔のくゞもりて

柏汁をすする夜更けの悲しけり

柊の白と香焚く尼の寺

しばらくは光のこして除夜の寺

羽をつく昔を今に京舞妓

眠るまで嫁ぎ時なり大晦日

山寺の灯りともりて年迎ふ

牡蠣割女寡黙の夜を一人寝る

茶の花や岬の灯台夕せまる

牡蠣船や障子の影は仲居のみ

乱世にひとり梶博士あり

たし喜んでいたのである。

### 節分の豆まき

豆まきは通常、夕方から深夜にかけて行うものである。夜になると暗闇に鬼どもが潜んでいて、飛び出して家に侵入する機会をうかがっているからである。豆まきは鬼の出鼻を封じて、先制攻撃をかけるわけである。鬼が豆に打たれて辟易している間に、福を呼び入れてすぐさま戸を閉めて一家安泰を祈願するわけである。立春の寒さには冬の余寒が残つてゐる。締め出された疫病、貧乏神を呼び込む鬼どもは、この夜のしんしんとした寒さには堪えられずに逃げ散つていくことだろう。親父からは番頭に祝い金が渡され、番頭はそれを小僧さんたちに分けてやつてゐる様子を、私は恨めしそうに眺めていたのである。落ちている豆を拾つては口に入れ、早く大人になりたいと思う数だけ口に含んで、達成感を満

豆まきは通常夜に行うものである。鬼が昼間に出てくるはずがない。桃太郎が犬と猿と雉を供につれて鬼が鳥を攻略し、悪い鬼らを退治した時もやはり夜であつたと思う。だから豆まきは夜にすべきところであつたが、今日は小生の帰宅がはつきりしなかつたので、機を逃したでは縁起が悪いし、豆まきの効果を發揮しなくなつても困るので、節気に従つて時間厳守はともかくとして、日にちだけは違わずに守るべきだと思った。その旨家内に告げると賛成してくれたので、出勤前に豆をまいしていくことにした。家内を供に従えて、豆を漆塗りの御椀に入れ替え、神棚ならず仮前に寸時供えてから、家中を巡つていくことにした。先ず一階の応接間から和室、厨房から風呂場、そして廁と順繰りに戸と云う戸、窓と云う窓をことごとく開けて、鬼は外、福は内と連呼して、後に従う妻がこぼれた豆の

あと始末をしていった。最後に玄関のドアを広く明け放ち、大声を出して台詞を言い放つた。その時、鬼に似た憎たらしい男の顔が数匹浮かんできた。女もいたらしい。

小劇場の一場面を思い出すようだが、男は相撲取りみたいいでぶつた奴で、コンサルタントと云つてみて散々に悪事を重ねてきた痕跡がある。また、不動産開発業者と云つてみ

たり、国際的金の取引業と云つたりしていて、所詮、何だかわからない人物である。窃盗犯の経験もあるのではないかと思われる。こうした手合いは世の中にたくさんいるようである。女の婆あは、中年と思われるが、可成りの精神異常者ようだ。大きいことばかり言つて相手をはぐくらし、普段は何食わぬ顔をしているが、一皮むけば得体のしれない化け物のようである。ビジネスの世界でも、すました顔をしながら人の金をかすめ取ることに長けていて、中味は冷酷非情である。いずれ

も人を装つて心は野獸に等しい類いである。こうしてみると、鬼が島の鬼どもの役者は一通りそろつたような気がする。金にまつわるこの人物像が、すべての惡の根源を持つてゐるから、ここに神と、博士とメフィストと神父を登場させれば、世界の文豪、ゲーテのファウストに勝る大文学作品が完成するはずである。

乱暴者の凶悪犯の予備軍が、秋葉原だけではなく銀座にも渋谷にもたむろしていると見なといといけない。多くは精神異常者である。差別だといわれるといけないが、突き詰めると、そもそも殺人を犯す奴は精神と性格に欠陥があると見なければならない。犯罪を犯す前には気が付いて、去勢できるものならしかるべき治療することが大事である。これを放置することは、むしろ社会悪につながつてくる。犯罪予防と警備にあたる防犯警察官は休む暇もない。相手は異常者が多いから、どんな凶器

を懐に隠しているかわからない。思い起こすのも嫌だが、オウム真理教のサリン事件が世界を震撼させたテロの始まりとも云われるが、普通の感覚であれば考え及ばぬことである。それに準じた怪しい行動を行っていたのだから、しっかりと内偵していれば事件を最小限にとどめられたかもしれない。犯罪者は押しなべて、人面心獸と云う言葉通りである。しかも毎日のテレビを見ていても一般世間の、そうした報道が多く、犯罪は若年化してきている事が恐ろしい。

インターネットのウェブサイトを開けば、犯罪化への材料と誘惑は、目を覆うばかりに氾濫している。見ることも簡単で自由となれば、それだけ子供たちの心の汚染が進んでいふことにもなる。馬鹿騒ぎを演じたり、殺人事件をドラマ化したりするテレビ番組も目にはならないが、先日も地下鉄に乗っていたら、

吊るし広告にラフの男女が絡み合う姿が大きく載っていた。性の刺激的広告である。テレビ朝日のセカンドラブというタイトルだったが、ああしたものが通学する小学生から目に入ってくる世情である。情けない話だが、世の中なんて言うものはそんなものかもしれない。世界を見渡しても、戦争と云う名の下で残酷非道な行為が毎日行われているから、考え出したらきりがないが、せめて自分の周囲だけでも平穏でありたいし、広くとらえれば、今国会が開かれているけど、平和主義、民主主義の日本と云う国がそうした禍に巻き込まれないように、これだけは与党野党を問わず一致して、政治にもしっかりと指導力を發揮して、国民が安心して暮らしていくようにしてもらいたいものである。暴力と貧困を排除し、この平和主義、民主主義を守り抜いていくことは容易なことではないが、この平和主義、民主主義に抵抗する悪魔の誘惑

は常に我々の理性の隙を狙っている。一度羽目を外したら、今日の、世界の中の日本と云う国の品格と尊厳が失われてしまうような気がする。

我に返つて手元を見ると、豆がまだたくさんあつたので、もう一度豆を握つて力いっぽい投げつけた。顔面にあたつたらしく悲鳴に似た感じの音がした。一目散に逃げていく亡靈のような影が見えた。世の中には人間の顔をした野獸や、惡魔みたいなのが結構いるものである。人の群れに紛れ込んで悪さをする、一見紳士、淑女のように見えるが、常習犯的なところがあつて狡知的であり油斷がならない。私は人は皆、善人だと思つて今まで來ているが、性善説を日常唱えているけど、しかし注意が必要である。節氣の豆まきは、そのことを諭して、ご先祖さまが我々に設けられた大切な行事の一つである。うろうろしている鬼がまだいた。最近見かけるようになつ

たやつである。ついでに追い払つておいた。

二階に上がつた。ここには昔、子供の部屋が二つあつてそのままにしてある。沢山の書籍や荷物があるが、整理がつかないままに置いてある。部屋に入ると、それぞれ小さいころの息子と娘を思い出す。それと小生らの寝室とパソコン部屋がある。寝室は、ちょっとしたしやれた書斎にも利用しようと思つて、大きな部屋を作つてしまつたが、有効に活用した覚えがない。学者や物書きではないので、そんなおおそれた部屋は必要でなかつたが、若いころの夢だつたが、柄になく、遅まきながらやつてみたことなのだろう。以前から掘りごたつでも作つて一杯飲みながら、縁豊かな裏の借景を楽しむのも粹かなと思つてりしている。娘の部屋は現在、妻が重宝して使用している。二階からの景色は、南側の視界が広く、九品仏の境内の森林が広く見渡せて見ても飽きない。下を見れば、拙宅の多少

の庭と庭畠が見下ろせる。普請した時はベランダを広くとつていろいろな用途に使うつもりでいたが、有益に使つたことはいまだない。東側は全開の見渡す景色で、晴れた日に眺める朝日の趣きは抜群である。北側の小生のパソコン室は、元納戸であつたのを取り払つて、二年前に小部屋としたものである。四畳半ほどの小部屋だが、シンプルで無駄なものは一切置いていないのでゆっくりして過ごせる。裏の小池さんの豪邸と贅沢な庭を借景としたものだから、拙宅の中でも一番贅沢な部屋である。季節によつて違うが、京都に行つたような感じもするし、軽井沢にきた時のようにも感じて、四季の移り変わりを己ながらにたのしんでいる。二階でもこうした部屋々々の窓や戸をことごとく妻が明けた後、豆まきの台詞を連呼して行事を終えたのである。廁も勿論である。

一通り行事を終えてみたら、おわんにあつ

た豆はきれいになくなつて、赤い漆の御椀の底が、丸くきれいに光つていた。ルビーの底に吸い込まれていくような感じがした。鬼も、鬼の卵も打ちのめされ、追い出されて、家中が大晦日の大掃除の後のようにきれいになつていたのである。そう云えば、立春とは新しい年と云う意味がある。しかも春になる前の日のことを意味する。お正月、元旦の前日、即ち大晦日と同じ意味があるということ、即ち新しい年を迎える前の日と云う意味だそうである。鬼払いは大晦日の大掃除と云うことにとらえて、心身の浄化につながる。立春の豆まきは、明日から新しい年が始まるということに解釈して、周囲から邪氣を払い、鬼退治をした意味合いがまた深くなつたような気がしてきた。

神だなに供へし節句の豆まきに声はりあげて鬼を払へり

鬼どもに豆をぶつけ追ひはらい慌て逃げ行

くさまを見届く

福はうち鬼は外とぞ連呼して無病息災を祈る

節分

木の影にまだ隠れをる鬼を見て豆なげうてば

慌て逃げゆく

豆をまくあとにつがいの鳩が来てついばみを

ればのどかな

家のうち外より鬼を追ひはらい無病息災に打ち笑ひけり

木の下に鬼の子供が逃げ連れ怯えておれば慰めにけり

作戦を練り豆を炒る豆まきの鬼の退治に先制を期す

鬼に似たわづかな人が居るがゆえ性善説もふらつきにけり

鬼どもの中にもおんなが正装し混じりていれば奇異におもへり

略奪す財宝を背の鬼どもに果敢にいどむ我が

桃太郎

玄関にふんぞり返る赤鬼を諭してみればしほらしく聞く

鬼が島鬼の退治に桃太郎家来を連れて凱旋の道

平和主義民主主義の日本と叫びて世界の鬼を退治す

二月三日

### パリのテロ事件

歴史上、幾多の戦乱、混乱を経た人々が、自由を求めてフランスのパリに集まつてきた。そして専制と隸従、圧迫と偏狭から逃れた知識人が、文化人がパリの自由に憧れて、パリは自由の象徴的な街であつた。その街に、言論の府たる新聞社に、狼藉無法者が宗教的な対立と理由で、白昼公然と銃を以て襲撃し、幹部、編集人、記者の諸君ら十二名を殺害、逃走した。フランスの新聞発行社・シャルル社の発行する風刺漫画が、イスラム教を冒涜するものだとしてその新聞を襲撃したのである。民主主義の根幹を揺るがす事件である。

表現報道の自由に対する暴力的行動はテロと同様、絶対に許してはならない。まさかの事件であつたせいか、車で逃走する二人の犯人を容易に取り逃がした警察など、日本では考えられない光景である。追跡も漫然とする

有様で、逃走経路がはつきり把握できず、軍隊まで出動し人海戦術で探し回っている。いずれ犯人は拘束されるか、抵抗すれば射殺されると違いない。捜査、追跡の初動体制がまづく、後手後手に回る通常のパターンである。警察の訓練不足を衝かれた点もある。犯人はよほど訓練されたアルカイダ系の人物だろう。黒覆面と黒ずくめの軍服スタイルで小銃を抱えて乱射しながら現場から立ち去った。結局パリから百キロほど離れた、村落の工場に人質を抱え逃げ込み、追跡する警察隊に射殺された。人質は無事であつた。

世界を震撼させたこの銃撃事件は、表現の自由を抹殺するものだとする多くの市民の反暴力、反テロ運動に発展し、フランスでは各国の指導者を含め三百五十万からの人デモ行進となつて全土に渦巻いた。パリでは百万人のデモとなつて街路を埋め尽くしたのである。

表現の自由が認められなければならない。世界にはさまざまな宗教があつて、それはそれなりに尊ばれるものであつて、眞の信仰こそ、これもまた自由である。宗教を利<sup>用</sup>して独断、独善的に悪用しようとする者も出てくるだろう。こうした風潮や傾向は、おのずと排斥されたり締め出されたりして自淨作用される力を持つている。宗教の中でもイスラム教は戒律が厳しく、一神教であり、キリスト教もしかり、正しい信仰の道を説いているからこそ、多くの信者の信奉を得ていいるのである。地域の状況や、民族の歴史等によつて生い立ちなどによつて、ものの考え方や見方が違つてくることは当然であり、宗教も、何を以て信仰の対象とするかは違つて当たり前である。

しかしながら政治的空白地域のイラクやシリアル一部を実効支配しているかに見え

るイスラム国のように、イスラムの名のもとに、イスラムの聖戦と云う名のもとに無頼漢同士が狼藉を働き、周辺諸国に混乱と恐怖を植え付けていることは、そもそも宗教の道を逸脱する行為であることは分かつてゐる。たまたま世界の若者が自分の苦境から逃れて活路を得るために、こうした行動に走つていく風潮にあるが、それはほんのひとにぎりの若者であつて全てではない。こうした彼らにはもっと他に生きる活路を見出してもらいたいと思うが、今の世界が説得力に欠ける原因にもなつてゐる。こうした傾向を報道するマスコミにも責任がある。即ち、マスコミによつて誇張して報道されているきらいがある。こうした見方は、無知蒙昧とは言わないが、こうした若者たちを扇動する結果にもなりかねない。

パリに居住するイスラム教信者たちは、敬虔な祈りに暮らす人たちが多く、アラーの神

を冒頭したとして暴力的行動に出たり、こうしたテロを起こされたりすると誠に持つて迷惑千万と考える人たちが一般的である。新聞社は反イスラム的思潮を掲げて風刺漫画を継続して大規模に発刊したりするが、いさか便乗気味の商業的匂いがしたりして、冷静さを失つたりしてはいなかといぶかる向きもある。さらなる混乱を煽り立てる結果になつてもまずいのではないかと考えたりしている。むしろ彼らの思うつぼにはまりかねない。ここは冷静に対応すべきである。

自由の象徴である世界のパリに起きた銃撃事件が、表現の自由の大切さを世界的に呼び起ことしたということについては、それなりに忘れてはならない意義のあることであった。表現の自由は、えてして忘れがちなことながら、この自由を封殺された世界こそ、暗黒の世界はない。多くの人々が歴史上、この自由を失つたがために犠牲になつてきたの

再びアルカイダを主流としたテロ行為が活発化の兆しである。政情の不安のすきをついて活動拠点の確保に乗り出し、残虐行為を行つて始末が悪い。今シリアのアサドの無政府状態の施政や、イラクの体たらく政治の隙をついて、イスラム国の勢力拡張が問題となつてている。特に混乱状態の続くシリアに広く浸潤している。そうした地政学的動きを巡つてイスラムの暴虐行為が盛んに報道されて、実態は依然としてベールに包まれて、

である。人間が人間として生きていくために必要な権利であることを忘れ勝ちであるが、我々がこれを忘却したり放棄したりすることは、人間失格に与えするものである。お互に自由を尊重しあい、互譲の精神の涵養に努めることに留意しなければならない。信仰の自由、宗教の自由も然り。

我々も判断に当惑気味である。こうした中、日本人の二人がイスラム国に拘束されて、人質に取られ多額の身代金を七十二時間内に支払えとインターネットで世界に配信され、世界に衝撃が走った。おりしも安倍首相が中東地域を訪問中で、イスラム国の台頭で被害を受けている避難民に対する人道的支援として二億ドルの拠出を発表した後に、この事件は起きてしまった。日本政府はあくまで人道支援を目的としたもので、軍事的意味合いはないと強調するが、イスラム国はこれをどう受け止めてきたかである。一月二十二日

その後拘束された日本人の救出に向けて、政府はもとより友好国ヨルダンを巻き込んで対イスラム国との情報合戦が繰り広げられた。マスコミは連日のごとくその模様を報道し、二人の安否を気遣う世界の人たちが、そうした情報を翻弄された。私は一月十九日

のホームページに最初の記事を載せて後の動静については沈黙を続けたのである。あまり大げさに騒いだりするとかえってイスラムの思う壺にはまるだけだからである。中東諸国は、アラブの春以前のイラクのフセイン時代の乱脈な情報合戦に翻弄されていたころから、照り行為の活躍する場面となつた。アメリカのイラク戦争でサダム王国が瓦解し、この地方の統治機能が不全状態になつてから久しい。あの地域は歴史的にもオスマントルコの時代から、多くの種族が勢力を張り巡らして常に政情不安の状態であつた。イラクのサダメフセインが強権力を以て鎮圧していたので、国自体としては統治機能を發揮して支配することができたが、フセインが失脚した後は現在に至るも点々バラバラの状況である。アメリカに起きた九・一一事件は、フセインが関与したかのごとく世界にも映つたし、あの世界知らずのフセインがはつた

りをかましていなければ、世界から暴虐者扱いされないで済んだことであった。対応が実にまずかつた。

もとよりアルカイダのアメリカ攻撃に始まつた九・一一ビル破壊のテロ事件に始まつたことであるが、あの攻撃は既に情報としてブツシユの耳の入っていた事案である。あればどの大大的な規模のテロ事件の計画が、アメリカの諜報機関が逃すわけがない。何らかの隠された陰謀が、アメリカ内部であつたに違いないが、これは闇に葬られたままである。事前に防止できたテロ攻撃であつたが、これはアメリカ史上に残る諜報活動の甘さであり謎であった。結果多くの十問人命が犠牲となつて、世界に衝撃を与えたのみならず、以來アルカイダ系から派生した暴力集団と、テロ集団の活躍を許す結果となつて今日に至つている。一方的に行われたイスラム過激派の国家樹立宣言など、論外な話であるが、シ

リアやイラクがぶざまな状況だから、その間隙をついてテロ集団が地域支配に乗り出している。住民としては無秩序の混乱状態にいるより、安定した統治能力さえあれば、従順に従うほかないだろう。イスラム国家はシリアやイラクが残していく武器や弾薬を戦利品としてこれを活用し、戦闘威力を増している。国家形態は民主主義制度が完璧に敷かれていれば住民の意思決定で決まるものだが、未熟な地域ではそうした手法では民意が形成されない。略奪した物品、例えば石油資源などを原資に、巧みな宣伝勧誘政策を以て、世界から戦闘員として若者たちを集めたりして戦力を補強している。今の時代に不満を持つ若者が世界にはわんさとたむろして、行き場をこうして方向に向けてはする放浪物が沢山いる。目的も夢もない若者にとっては、強烈なインパクトがあつて、盲目的に逃避する先もある。こうした人物が洗脳

されて、訓練されて世界各地に向かっていき、帰国先で連携してテロ事件を起こすようになつてしまふと、世界中にテロの脅威の拡散を促すことにもなりかねない。

私はイスラム国による日本人の人質事件については、沈黙を守つて話題的にホームページに載せることはしなかつた。歴然たる理由があつたからである。事件が起きてから、十二日間が経過したが、結末は先に友人と称する西川さんが殺害され、残る後藤さんも取引ができなかつたとして殺害された。ヨルダンに拘束中の死刑囚の釈放を巡つて、不発に終わつたが、イスラム国としては戦略上、十分採算の取れた結果となつてゐる。これほど世界中にイスラム国の存在を大きく流したこと以てプロパガンダは成功しさらに力を増したことだろう。今日の二月一日の時点で、その結果がはつきりしている。有志連合に参加する国々に対してもさびを打ち込

み結束の混乱を狙つてゐるが、さらにはテロの拡散を宣言したりして、世界中が一瞬怯えた感じである。世界の若者の中にイスラム国に行きたいと願つているものが仮に足元に潜んでいるとしたら、そうした連中がいつ単独に暴發しないとも限らない。そうした連中の単獨行動を許したりする国々が、いま世界の不安定地域や国々に拡散されていることも看過できない。他山の石として我が国の治安対策も万全を期しておかねばならない。そしてあまり刺激的な発言をして、いたずらに相手側の敵愾心を煽り立てたりしないことである。

日本はここ七十年間、戦争放棄を貫いて、平和主義、民主主義に徹して、国際社会に貢献してきた。これが戦後の日本の驚異的経済発展を築き上げてきたのである。軍需産業の牽引によるものではなく、技術の平和的開発、平和的利用を主体に日本経済の盤石の基礎

を独自に打ちたててきている。産業経済のこの実力は世界に冠たるものである。遅れて訂正したこともあるが、中東訪問の安倍首相の二億ドルの人道支援の発言も、戦争には参加しないが、の但し書きである。これの真意が向こうに伝わらなかつたがゆえに、二人の日本人の人質事件に発展し、国際社会を巻き込んで、ヨルダンのより激しい対イスラム報復を招くに至つたのである。一歩間違えばヨルダンの王政制度の政治に対する民衆の反感となつて、混乱を招きかねないものである。



作品 関根常雄

## 寒波到来

立春の豆まきを終えて徐々に日差しが春めいてくるかと思つていたらさにあらず、その後の天候不順と、連日の寒波に驚きながら今日は今シーズン最高の寒波到来との報道である。北海道の五千メートル上空にマイナス45度と云う寒波が来ており、東北上信越にかけてはマイナス三十六度の寒波が広がつて、こうした地域には豪雪を伴つて暴風となつているとのことである。家内が東京駅北口で戸から上京する友達とあつて、久しぶりに歓談するというので出勤時に一緒に出掛けたが、春の行楽雰囲気に油断して薄着で家を出てきたので、地下鉄日比谷線で銀座を降りてからオフィスまでの間、おもつたとおり強い寒さの風がオーバーにしみこんで肌に触れてくる

感じであつた。薄着と云つても下着を一枚、それも夏に着るクレープシャツを一枚加えるだけだが、厚いのを一枚着るよりも、薄くても重ね着するだけで温かさが違う。

それでもこのところの天気予報が、連日のように大雪になるという見通しが見事に外れて幸いだと思っている。この寒波の特徴は、例年だと北極圏からシベリアに下つて、そこから偏西風に乗つて日本周辺にやつてくるのが、今回は、北極圏から直接南下して日本列島を直撃してきているためだという。温暖化が叫ばれて、その一つに北極圏の巨大な氷河が溶け出したり、崩れ落ちていく様子を見て心配する今世紀だが、出来ることなら日本や大陸にもたらす寒波が、そのまま北極圏に長期滞在してもらつて、今の氷河の上に大量の雪をもたらし氷河の堆積をもたらしてほしいと思うのだが、なかなかそうはさせてくれないのが大自然の捷なのだろう。豪雪地帯は既

に三メートル以上の積雪があつたりして、日常生活に大きな支障をもたらしているが、特に過疎地にある空き家などが除雪されないがために、屋根に積もつた雪の重みで倒壊したりするケースが沢山あるようだ。一人暮らしの老人がこうした地域にはたくさんいるので、事故を防ぐための万全の配慮が必要である。冬になると、特に豪雪の時期には寒い北国に住む人たちの生活は大変だろうと思う。生産性は半分、生活費は二倍、と云うわけではないかもしれないが、効率的に見てそんなことを勝手に考へてしまふ。温かい地方の人間は、のんびりしすぎて間延びして鍛えられず、頭に緊張感がわからず、結局人間的に見て比較論的には落ちるということになれば、単純に割り出せない理屈かもしれない。地球と生活環境と適合性から見て、うまく調和がとれているのかもしれない。大手商社のK氏と要談のあと予定をしていた所要で信濃町の慶應病院

まで出向いた。二時間ほどの時間を食つてしまつたが、いったん帰社するのを思いとどまつてこのまま早めに帰宅しようかと思つて、信濃町駅から代々木駅に出て山手線に乗り換え恵比寿駅で降りた。恵比寿駅のアトレの千疋屋に寄つてコーヒーでケーキを食べようかと思ったが、女性客で満員だった。外は相変わらずの冷たい風である。しかし空はすっかり晴れあがつて、凍てつくような空には夕焼雲の色が鮮やかに光つっていた。雪が降らなくて良かった。

自由が丘で家に電話したら家内は出掛けたまま帰つていらない様子であつた。まだ5時をまわつたばかりだったので、そのまま尾山台のドトールの店によつて、いつもの席に座つてコーヒーを飲みながら歌を書き始めた。家にも近いし、憩いと安らぎのひと時である。思いつくままに、三十首ほど読んだであろうか。ゴルフでもなければ観劇でもなく、安上

がりな趣味である。しかし知、情、意で得るところは比較にならないし、創造性の發揮であるから、偏りすぎないように努める努力は大事である。

学者の偏屈、絵描きの目くらではないが、常識、良識を以て世の中に対応するには、のめりこんで独善的になることを避けなければならない。視野を大きく以て、広く知識や情念を社会に求めて一番大事な協調性を涵養していくことだろう。お父さんは大丈夫よ、明るくて人付き合いはいいし、もとより性善説の人だから大丈夫よと太鼓判を押してくれた。ありがたいのは女房の存在である。おふくろが亡くなる前に言つた一言がある。夫婦仲良く暮らしていくんだよと云うことだった。残していくたものは大した金目のものはなかつたかもしれないが、この一言だけがいつまでも光っている。当たり前のことだが、家庭の基本である。このことを守つていくことが、例えば、男なら立身出世の道に

しても家庭にいざこざがあつてはかなえられない。

又家庭を持つてゐる男にはある程度の信頼性があつて、自制心が働くから、人様に迷惑をかけることの確率が低いということになるかもしない。いずれにしろ家庭円満が幸福の第一でなければならないし、そうした教育と環境を小さいころから植え付ければ自然と身について、教養として人柄にも反映していくのではないだろうか。子供のころに両親が離婚したという話をよく耳にするが、子供にとってはこれ以上の悲しみはないだろう。そうした思いが大きくなつてからも消えずにする人だつているに違いない。学問を受けるばかりが教養ではない。家庭がしつかりしているから、地域社会が確たる発展を遂げ、地域社会は国の在り方に反映され、国が大いに平和の裡に発展していけるから國際社会に秩序と相互理解が築かれ、ひいては人類社会が幸

福のうちに歩んでいけるとする友人の発言があつたが、事は左様に大きく飛躍して演繹されて、かつ帰納されていく理屈だと思つた次第である。家庭から養われていく、人としてのたしなみが大切であり基本でなければならない。「夫婦相和し、朋友相信じ」とはどこかで聞いた言葉であるが、決して懐古趣味からではない。

天気予報が外れて、これがきつかけで春が来るようだといい。これを裏打ちするかのように今日のお天気は温かくほんのりと春めいて来て、梅の花がいつぺんにほころんでいく感じである。だとすると昨日おとといの北国のある豪雪の様子と、荒い吹雪はなんだつたのだと忘れがちになつてしまふ。折角詠んだ雪の歌は、早く書かないと解けてしまうかもしれない。それでは・・・と思つて、家に着いたら時間を見て書き込もうと思つていたところ、メモ用紙に書いた紙切れを事務所に

おいてしまつた。明日、明後日の気温の温かさで、雪の歌は溶けてしまうかもしない。不思議なもので、また書けばいいじやないかと云われても、いくつも書いたり書き残したものを見出しても書くということは不可能に近い。つまり創作で、同じものを二度試せというもので意味がない。創作は一度だけの新鮮なものだからである。そこで納得してかけなくともいいやと思うのである。雪の積もつた季節ではあつたが、地元の仲介業者からの誘いで北海道の十勝平野の広大な土地を買うために出向いた時の情景を思いだし、昨日までの寒さを重ね合わせて詠んだものである。あの時は一面の雪の大平原を雪上タイヤの車に乗つて、帯広から上士幌までほぼ一直線の道を走つていつたものである。そしてその夜は十勝温泉に宿をとつてくれた。いずれ近いうちに気が付いて載せることにして、今夜はゆっくりと寝たいと思う。それにしても

今日一日は上客が次から次と来社され、千客万来の感じであった。上客なんて久しぶりに使う言葉だが、良いお客さん、お得意さんと云う意味である。商人がよく使う言葉で、敬意を込めたものである。今どきのサラリーマン、ビジネスマンはそんな言葉を口にしないだろう。ナイス・トニー・ミーチウーと云うに違いない。即ちグッドウ・カストマーである。経済社会も、約束を守り、お互いにワイン・ワインの関係で理解しあい、そうした関係で商売を進めていきたいものである。渋沢栄一ではないが、取り引きを通じて人の為になる、昔の商人には商人としての誇りを持っていたものである。それは今も昔も変わらないものである。

今日のニュースには戦後から絶大な力を誇つて日本の農政に大きく影響を及ぼし、実質的にも農家の經營經濟を支配して権勢を誇ってきた全中が、政府の改革案に歩み寄つて大

きく改革の道を進むことになった。全中の権力的な支配権を奪つて骨抜きにする覚悟であったが、一度にはそこまでいかなかつたが、全中（全国農業協同組合中央会）の農業協同組合に対する監査権を撤廃に追い込んだことは、安倍政権の勇気を買つた改革、前進の大成功の事例の一つである。全中の監査部門を切り離し、独立した監査法人として一般社団法人化させることにした。そして各地に四〇〇からあるといわれる地域農協の選択に任せることにした。農業の近代化を図るには、保護政策から脱皮して、国際競争に打ち勝つていく体質改善への努力が必要である。農業従事者が自由に創意工夫を發揮する基盤を確立しなければ、若者の参入する分野にならない。画期的な出来事であり、前進である。日本の農業も、国際化の波に乗つて大転換する時期に差し掛かってきた。日本の農業に黒船の到来と位置づけても、異論あるまい。

北国を襲つてゐる冬将軍が去つて、早く春  
がやつてくるように、祈るばかりである。豪  
雪は、その年の豊作の良い兆しと云われてい  
るが、豪雪で、過疎地の老人たちが取り残さ  
れたり、怪我をしたりしないように祈るばか  
りである。夜空を見上げると、今夜は風も収  
まって気温も多少上がり氣味で、煌々とした  
月明かりである。

二月十日

平成二十七年三月十二日印刷  
平成二十七年三月十六日発行  
第六十六巻

昭和経済

第三号

佐々木 誠吾

編集人  
兼发行人

印刷所 日本印刷株式会社

発行所 公益社団法人

昭和経済会

事務局

〒104-008 東京都中央区八重洲二ノ十ノ二

TEL (六八一〇) 6000番  
FAX (三三七一) 三一〇四番

e-mail=info@showa-ecor.jp

<http://www.showa-ecor.jp/>

## 超激務の安倍首相

心身ともに絶好調の安倍さんである。テレビの報道を見る限り忍者のように活動する素早い安倍さんを見て、いったい休む時間が十分に与えられているのだろうかと案じるくらいである。内外の仕事を迅速にこなしている様子に、真似るわけではないが、毎日の

仕事を前にして自分も負けじと発奮して考え、動き回っている昨今である。官僚の諸君が安倍さんを補佐して準備万端、そつがなく用意してくれるとは言つても、骨子は首相自身のものがなければ、仏彌つて魂をいれずで、ものにならない。大事なところは安倍さんの政策理念を基本に入れて、国民に訴えるものとしなければならない。国会の開会に始まつ

た衆参での施政方針演説、代表質問に対する答弁、衆参での論客を相手にした衆参の予算委員会での集中審議に対する答弁に、連日のごとく終日を費やしていたと思うと翌日には、来日中の英國のチャールズ皇太子と福島視察に向かっており、また常磐高速道路の開通式に臨んで帰京したと思ったら、今日は又朝から国会での集中審議に熱くこたえている。

野党の質問者に対して、質問中に思い余つた首相が言葉をはさんだことを以て野次を飛ばしたと、その品格を問われたり、散々な目に合う場面もあるが、仕事だから仕方がないと云つてしまえばそれまでだが、うかつな発言は厳に禁物である。首相自らこうしてみると質問者に野次を飛ばすというくらいでなければ、我慢ばかり強いられていても気の

毒な気がする。そんなことは云つていられないのだが、事は国家、国民に関する重大な話し合いをしているのだろうから、真剣であれと云うことには理解すればそれでよい。国会の論戦のテレビ中継を見て、言論の自由がいかにこの国で行われているか、如何にこの国に民主主義に貢献しているか、如実にわかるよう気がした。こうしてみると年齢的に首相が務めるのは、せいぜい六十五才までだろう。

これまでも大臣が政治と金を巡つて辞任したり、辞任すればすぐ次の大臣の就任式であつたり、それ以前に、疑惑の大臣を一生懸

命かばつたりして神経の休まる時もないだろうに、同情しながらも声援を送つてているのである。頓馬な大臣の答弁で、議場が荒れることもある。議事進行も、安倍さん次第でどうにでもなつてしまふから、その場の当意即妙の適宜、適切な判断が必要である。官僚諸君との緊密な連絡と意思の疎通がなければ一人ではやつてゆけない仕事である。安倍さんに付く菅官房長官も大変だろうが、安倍内閣は安倍さんが一人舞台の大活躍で、ほかの大臣諸侯は無論のこと政務次官や、党幹部や務大臣の麻生さんが勤めているが、苦虫をして、ご意見番としての威厳を以て臨んでいるのが頼もしく映るのである。

このかの村委会員の諸侯のように、温泉料理屋の部屋を借りて、親交を深めながらコンパニオンを呼んで議論をしあつてゐることはな

いだらうとは思うけど、どちらかと云えばそのくらいの呑気な時間もあつてもいいだろ。ただしけちつたりして、コンパニオンの線香代も払わずに税金で落とすような気持では大した仕事はできない。失格、落第である。安倍さんが懸命に働いている間、暇を持て余し、好きなことをして遊んでいることはあるまいと思うのであるが、それは見ているわけではないので分からぬ。

一人舞台の偉人とは云つても一人の力には

は限りがある故、有能な政治家や官僚諸君が隠れているとすれば、安倍さんを見習つて進んで意見を発表して、多くの賛同を得て積極的に行動を起こすべきである。それが公人としての務めである。近頃は何かと云えばすぐニマスコミにスクープされたりして物議をかまし、物言えば唇寒し、で優秀な官僚諸君

たちの発言が後退しているのもさびしい気がする。昔は、当会でも各省の優秀な官僚諸君に講師をお願いしたりすると、積極的に喜んで来て下さったものであるが、あの頃以来、影をひそめておとなしくなつてしまつた。最近は退官したりした諸君が独立して評論家に転身したり、大学に籍を置いて学徒の教育がてら教授にとして籍を置いたりして新天地を求めていく人が多く見かけるようになつたが、これは甚だいい傾向である。

学生時代から実社会で活躍する人たちの指導を受けたりすることは、若い研究者にとっては早くから実践的な訓練を積むことにもなつて、世の中に即戦力として活躍できることにもなる。むろん基礎的な学問研究を積んでのことである。優れた先輩たちに学んで、多くの人が立派な理念、立派な意見に賛同し

て行動を起こすだろう。安倍さんが提唱する積極的平和主義と同じように、積極的民主主義につながってくる。積極性を發揮することは、世の中のエンジンを最大限に有効に使う力であり、これを駆使しない手はない。話は飛びけど、東北大震災の復興が遅々として遅れている現実がある。会計検監査院の調べによると、震災、原発事故の東北被災地への復興予算について、その35パーセントが使わずに残されているという。又日経の報道によると、昨年の7月31日現在2兆6523億円の使い残しがあるというのである。さっぱりわからない事実が露呈されたが、これがいい加減な始末の実態なのかもしれない。

巨額の復興予算が現実に使われずにいる事実が分かったが、そもそも不必要なところに金を使わそうとする内容だから、使えない

でいるとも言える。稚拙な検討で予算を要求したりすると、こんな始末になるのである。余つて居るからとか、残っているからと云つて、早く使うように指示したりするのもおかしいのではないか。不必要な予算かもしれない。無駄な使い方は厳に慎まねばならない。そのお金は降つてわいたものではない。国民の尊い、汗と努力の結晶の税金である。国の予算の組み立ても大切であるし、予算の施行も現場で実効性、有効性を実現するものでなければならない。

一生懸命に働いている安倍さんもそうだが、同じように中小企業の社長さんたちだって一生懸命になつて働いていても、なかなか会社の業績を回復するまでにアベノミクスの恩恵が及んでこないというのが実情である。日銀の黒田さんによつてこれだけ金融大

緩和がなされて、日銀からお金がじやぶじやぶと市中に出回っていても、中小企業の資金繰りは楽ではないようである。東北の被災地ではお金が使えずにじやぶじやぶになつてお金のバブル状況のようだが、中小企業の資金は枯渇して操業度が低下している。資金分布の格差だ。地域的、限定的かもしれないが、その資金量は大きい。そうした観点から見ると都会と地方の資金的格差が存在して、おかしな逆転現象が起きている。

政・官指導の経済だとどうしてもこうした傾向になりがちだが、幸い民間経済で優秀な指導者を得た企業では、世の中の変転に即座に対応して企業の発展にむかっているし、それはトヨタを代表とする日本の大手企業の躍進する様に似ている。地域間のギャップ、企業間のギャップ、生活者のギャップ、

した現象の解消こそ重要である。外に向けては軍事的連携の誘惑を排し、平和的、友好関係を推し進めていくことが必要である。戦後七十年を迎えて、今、首相談話が論議の的になつてゐるが、談話があるとすれば、国内はもとより国際社会に大きな感銘を与えるような夢と希望にあふれた内容のものであつてほしいものである。即ち、清新にして氣宇壯大な内容のものであつてほしい。アルカイダ系、イスラム系暴力組織を飲み込むくらいの勇壮な政治的意識を確たるものとして、どこにでも向かい切つていけるような理念と意識が肝要である。物心両面からみて、こうした意味でアベノミクスも今、正念場にあることは確かである。

三月一日

表紙の言葉 佐々木誠吾

表紙のスケッチと、表紙の言葉で長年親しまれてきた画家の関根常雄さんが体調を崩されて今、秦野の介護施設に入所されている。穏やかで、誠実な人柄が先生の魅力であるが、絵画の世界でもその魅力を遺憾なく發揮され、多くの素晴らしい作品を残してきた。驚くことに最近初めて知つたことで、ご自身の告白でもあるが、若い時から片目の視力が失明に近いと知らされた。先生は片目での素晴らしい迫力に満ちた絵をかけてこられたわけで、天才、奇才に与えられた奇跡としか言いようがないと思つた。纖細なタッチで描かれたスケッチは、少年の心のよう純真、無垢な描写であり、詩的な情緒にあふれんばかりである。少年時代の憧憬を追いかけてゆく姿に似て、つましく清冽である。

油絵に至つては表現の技能はまさに真骨頂であり、色彩の機微は云わざもがな、画面に

あふれる情緒を以て、見る人の心深く吸い込まれていく感じである。

一昨年のこと有楽町駅前にある交通会館で関根さんが立派な個展を開かれたが、多くの作品は多くの来場者の感興と感動を奪つて、驚かした。幾多の展覧会に出品されて最高賞を得ること多く、常に高みを目指す寡黙な画家の一徹な気持ちを表すものばかりであつた。

昨年の春に、長年住み慣れた世田谷の経堂を離れて神奈川県の相模は、秦野の里に引っ越しして行かれた。大山にほど近い風光明媚の地である。経堂から秦野に移つてからも昭和経済の表紙の絵とエッセイを書いて、銀座まで届けに来られていたが、体の不調もあって、最近は郵便で届いた。今回の作品を最後に退きたいと伝えてきた。残念である。こうした時、当会の会員の住産サービスの鈴木さんが、関根画伯の十号の油絵の大作、二点を購入された。エジンバラの街と、ばらの絵である。

月刊誌掲載者・昭和経済論文（敬称略）

昭和五十三年（平成二十七年三月）

原田正二 大正大学教授

豊田雅孝

当会顧問

大内義一

早稲田大学名誉教授（巻頭隨筆）

安井謙

当会顧問

荻原伯永

（株）日本経済社 日経専務

窪田真也

第一勵業銀行産業調査部長

牛場信彦

外務省顧問

宝生あやこ

劇団手織座

広瀬嘉夫

NHK解説委員

山本幸助

通産省産業政策課長

安井謙

参議院議長

寺島祥五郎

通産省商政策局国際経済部長

加藤寛  
豊原兼一

慶應義塾大学教授  
N HK解説委員

山田勝久  
岡松壯三

通産省電子政策課長  
村山祐太郎

斎藤栄三郎  
岡村和夫

参議院議員  
NHK解説委員

岡松壯三  
通産省電子政策課長

石井義昌  
糸川英夫

桂川精螺製作所 社長  
組織工学研究所所長

村山祐太郎  
鈴木金属工業副会长

宮本四郎

通産省産業政策局長

堀江忠男  
寺島祥五郎

当会理事  
早稲田大学名誉教授

豊田雅孝

（社）日本中小企業団体連盟  
安井謙

安井謙  
前参議院議長

当会顧問 自民党最高顧問  
田山晃  
参議院議員

安井謙  
大来佐武郎

対外経済関係 政府代表

元 読売新聞政治部次長

鈴木三子郎  
元 税務大学教官 税理士

藤原弘達  
大来佐武郎

政治評論家  
竹下登  
豊田雅孝  
（社）日本中小企業団体連盟  
安井謙  
前参議院議長

自民党顧問  
田山晃  
参議院議員

当会顧問 自民党最高顧問  
元 読売新聞政治部次長

堺谷太一  
作家

大藏大臣  
衆議院議員

斎藤榮三郎	商学博士 法学博士 文学博士	水谷研治 東海総合研究所 理事長
参議院議員	バツラフ・ハベル チェコ大統領	河野洋平
衆議院議員	平野憲一郎 日本経済新聞 マニラ市局長	前川春雄
前 日本銀行総裁	吉田和男 京都大学教授	黒田眞 堀江忠男
通商産業省 通商政策局長	石川忠雄 慶應義塾大学名誉教授 学長	大月短期大学学長
水谷研治	中山素平 日本興業銀行 特別顧問	水谷研治
東京都知事	北岡伸一 立教大学教授	東京都知事
鈴木俊一	島田晴雄 慶應義塾大学名誉教授	田村次朗
東京国際大学教授	吉田和男 京都大学教授	目良浩一
東京銀行会長	塩野谷祐一 一橋大学名誉教授	行天豊雄
吉川洋 東京大学教授	宮沢喜一 元首相	吉川洋
慶應義塾大学教授	NHK解説委員	竹中平蔵
慶應義塾大学教授	石井明 東京大学教授	加藤寛
三和総合研究所 理事長	加藤寛 千葉商科大学長	原田和明
東京大学教授	伊藤裕章 政府税制調査会会长	鴨武彦
東京国際大学教授	朝日新聞ワシントン特派員	大山晃人
元 N H K 解説委員	東京大学名誉教授	小宮隆太郎
企業コンサルタント	青山学院大学教授	井浦康之

島田晴雄	慶應義塾大学教授	ランコ岩本 ランコ・インター・ナショナル代表
樋口廣太郎	アサヒビール会長	ジエームス・D・ウォルフエルソン
奥野正寛	東京大学教授	世界銀行総裁
橋本大二郎	高知県知事	山口光恒
福川伸次	電通総研研究所所長	シモン・ペレス イスラエル外相
鈴村興太郎	一橋大学経済研究所教授	岡崎久彦 元駐米公使
清水啓典	一橋大学教授	ポール・サミュエルソン 経済学者
高橋伸彰	立命館大学教授	大野健一 政策研究大学院大学教授
中谷巖	一橋大学教授	佐々木和男 サウディ石油化学副社長
金大中	韓国大統領	ドナルド・ラムズフェルド 米国防長官
佐和隆光	京都大学教授	イアン・ジョンソン 世界銀行副総裁
茅陽一	慶應義塾大学院教授	竹森俊平 慶應義塾大学教授
吉田和男	京都大学教授	朱建榮 経済評論家
榎佳之	東京大学 医科学研究所 大学院教授	山本清治 東洋大学
高橋伸彰	立命館大学教授	アレクサンドル・パノフ 駐日ロシア大使
月尾嘉男	東京大学教授	林光夫 ナショナル日系博物館ヘリテージセンター 理事(前理事長) 日系プレース基金理事
北岡伸一	東京大学教授	ハワード・H・ベーカー 駐日米大使
石原慎太郎	東京都知事	山本清治 経済評論家

ステイブン・ゴマソール	駐日英國大使	佐藤隆三	ニューヨーク大学名誉教授
山口義二	立教大学経済学部教授	曾根泰教	東京大学客員教授
公文俊平	多摩大学情報社会学研究所所長	平野雅章	慶應義塾大学教授
伊藤元重	東京大学教授	早稲田大学教授	
アルビン&ハイディ・トフラー	米未来社会学者	若田部昌澄	
中曾根康弘	元首相	大西隆	東京大学教授
ハワード・H・ベーカー	前駐日米大使	浜田純一	東京大学総長
竹森俊平	慶應義塾大学教授	中西寛	京都大学教授
岡部直明	日本経済新聞論説主幹	高木新二郎	前産業再生機構委員長
加藤寛	千葉商科大学学長	諸富徹	京都大学准大学教授
山口光恒	帝京大学教授	入江昭	ハーバード大学名誉教授
斎藤惇	産業再生機構前社長	林良造	東京大学教授
渡辺智之	一橋大学教授	クリスティーナ・アメージャン	
土屋堅二	お茶の水女子大学教授（哲学）	伊藤元重	一橋大学教授
山崎正和	中央教育審議会会長	今井賢一	東京大学教授
福江等	前ナザレン神学大学学長	名譽シニアファロー	
大田弘子	井深記念塾ユーライ		
経済財政担当相			

吉川弘之	東京大学 元学長	深尾京司	一橋大学教授
池尾和人	慶應義塾大学教授	山本 熱	慶應義塾大学准教授
細田衛士	慶應義塾大学教授	小黒一正	一橋大学准教授
林 良嗣	名古屋大学教授	吉川弘之	東京大学 元学長
土居丈朗	慶應義塾大学教授	大村敬一	早稲田大学教授
脇坂 明	学習院大学教授	庄司克宏	慶應義塾大学教授
関 満博	一橋大学教授	ジム・フレアティ	カナダ財務相
古谷 浩一	朝日新聞記者	伊藤元重	東京大学教授
御厨 貴	東京大学教授	清家 篤	日本私立大学連盟会長
田中明彦	東京大学教授	藤原帰一	慶應義塾長
西垣 通	東京大学大学院情報学環教授	緒方貞子	国際協力機構（JICA）理事長
山内昌之	東京大学教授	田中素香	中央大学教授
高安秀樹	明治大学客員教授	申 珊秀	駐日韓国大使
浜田宏一	エール大学教授	加藤弘之	神戸大学教授
若宮啓文	朝日新聞本社主筆	新宅純二郎	東京大学准教授
植田和弘	京都大学教授	岡部直明	日本経済新聞客員コラムニスト
松本 紘	京都大学総長	若宮啓文	朝日新聞主筆
大西 隆	東京大学教授	中沢克二	日本経済新聞社 中国総局長
山中季広	朝日新聞ニューヨーク支局長		

猪木武徳	青山学院大学特任教授	有田 哲文	朝日新聞編集委員
長山浩章	京都大学教授	柴田 直治	朝日新聞国際報道部
石川城太	一橋大学教授	竹森 俊平	慶應大学教授
鹿野嘉昭	同志社大学教授	磯田 道史	静岡文化芸術大学准教授
岡部直明	日本経済新聞客員コラムニスト	橘川 武郎	一橋大学教授
篠崎彰彦	九州大学教授	伊藤 元重	東京大学教授
翟 林瑜	大阪市立大学教授	山内 昌之	明治大学特任教授
横山 彰	中央大学教授	白石 隆	政策研究大学院学長
小林慶一郎	一橋大学教授	土屋 英夫	日本経済新聞本社コラムニスト
原 真人	朝日新聞編集委員	戸田 悅造	懸賞論文 優秀賞
若宮啓文	朝日新聞本社主筆	青山 慶二	早稲田大学教授
小林慶一郎	一橋大学教授	瀬口 清之	ギャングローバル戦略研究所研究主幹
須藤 繁	帝京平成大学教授	今井 賢一	スタンフォード大学名誉シニアファロー
翁 邦雄	京都大学教授	田中 伸男	日本エネルギー経済研究所特別顧問
下斗米伸夫	法政大学教授	宮本 雄二	宮本アジア研究所代表、外務省顧問
吉川 洋	東京大学教授	菅原 宅	東京大学先端科学技術研センター准教授
渡辺 博史	国際協力銀行副総裁・元財務官	白石 隆	政策研究大学院学長
澤田 康幸	東京大学教授	野中郁次郎	一橋大学名誉教授
北岡 伸一	国際大学学長	矢作 弘	龍谷大学教授

有吉 章	一橋大学教授
御厨 貴	東京大学先端技術研究センター教授
伊藤 大村	一橋大学教授
伊藤 敬一	早稲田大学教授
御厨 山内	放送大学教授
北岡 昌之	明治大学特任教授
葛西 伸一	国際大学学長
岡崎 哲二	JR東海名誉会長
山崎 昌之	東京大学大学院経済学研究科教授
橋本 池上	東京工業大学
橋本 朗	中央大学大学院経済学研究科教授
和仁 伸一	明治大学特任教授
石川 健治	東京大学教授
桂子 康之	大阪市立大学准教授
戸堂 早稲田	早稲田大学教授
三田 誠広	武藏野大学文学部部長
実 哲也	日本経済新聞社論説委員長
御厨 実	東京大学名誉教授
有吉 章	一橋大学教授
御厨 貴	東京大学先端技術研究センター教授
伊藤 大村	一橋大学教授
伊藤 敬一	早稲田大学教授
御厨 山内	放送大学教授
北岡 昌之	明治大学特任教授
葛西 伸一	国際大学学長
岡崎 哲二	JR東海名誉会長
山崎 昌之	東京大学大学院経済学研究科教授
橋本 朗	中央大学大学院経済学研究科教授
和仁 伸一	明治大学特任教授
石川 健治	東京大学教授
桂子 康之	大阪市立大学准教授
戸堂 早稲田	早稲田大学教授
三田 誠広	武藏野大学文学部部長
実 哲也	日本経済新聞社論説委員長
御厨 実	東京大学名誉教授
山内 昌之	東京大学名誉教授
北岡 伸一	国際大学学長
伊藤 元重	東京大学教授
川島 真	東京大学准教授
西條 郁夫	日本経済新聞社編集委員
滝 順一	日本経済新聞社編集委員
栗栖 弘臣	当会・講演会 講師（敬称略）
加藤 寛	昭和五十三年～平成二十七年三月
糸川 広洋	慶應義塾大学教授
大来佐 武郎	組織工学研究所 所長
斎藤 栄三郎	科学技術省長官
柿沢 弘治	衆議院議員
浜田 幸一	衆議院議員
木元 教子	評論家
岡松 壮三郎	通産省電子政策課長

稻川泰弘	通産産業省政策局	前川春雄	前日本銀行總裁
藤原弘達	商務サービス産業室長	大山晃人	NHK解說委員
山本幸助	政治評論家	野坂昭如	作家
岡松壯三郎	通産省産業政策局長	水野哲	通産省産業政策局
山田勝之	通産省生活産業局長	堀江忠男	產業政策局總務課長
鈴木幸夫	通産省國際政治部長	梅沢節男	国税庁長官
山室英男	テレビ東京解說委員長	田川誠一	進歩党代表
佐野忠克	NHK解說委員長	森亘	衆議院議員
河野洋平	通産省宇宙産業室長	藤井康男	東京大学總長
寺島祥五郎	衆議院議員	水城武彦	龍角散社長
長富祐一郎	当会理事	大山晃人	NHK解說委員
中沢忠義	中小企業庁長官	斎藤栄三郎	NHK解說委員
吉國隆	農林水産省大臣官房企企画室長	内田満	國務大臣 科學技術厅長官
天谷直弘	(財)産業研究所顧問	岡松壯三郎	通商産業省生活産業局長
元	通産省審議官	有馬朗人	東京大学總長
鈴木俊一	東京都知事	松本和男	経済評論家
黒田眞	通商産業省 通商政策局長	大山晃人	NHK解說委員
野村総合研究所	主任研究員		

鈴木淑夫	野村総合研究所副理事長 元 日本銀行理事	井浦康之	井浦コミュニケーショングンセンター 当会理事
松永信雄	外務省顧問 前 駐米大使 ニューヨーク市立大学大学院教	水谷研治	東海総合研究所 理事長
霍見芳浩	慶應義塾大学名誉教授	目良浩一	東京国際大学教授
村松暎	杏林大学教授	山下亀次郎	筑波大学 臨床医学系内科教授
飯田健一	NHK解説委員 L・A・チジヨーフ 駐日ロシア連邦大使	斎藤精一郎	立教大学教授
大山晃人	元NHK解説委員 東京国際大学教授	岩國哲人	前 出雲市長
小浜維人	NHK解説委員長 メディエーター（人間接着業）	浅井隆	経済ジャーナリスト
青木匡光	(財)日本証券経済研究所 主任研究員	岩田規久男	上智大学教授
紺谷典子	三和総合研究所 和田俊	久保亘	前 大蔵大臣
原田和明	朝日新聞編集委員 テレビ朝日ニュース・ステーション	大山晃人	東京国際大学教授
和田俊	副島隆彦 ポールシェアード ベアリング投信投資顧問 (株)日本株運用ヘッジ兼ストラジスト	吉田春樹	和光経済研究所理事長 経済評論家
大山晃人	早坂茂三 田中角栄 元 秘書	山田伸二	
木村時夫	早稲田大学名誉教授 NHK解説委員	山田伸二	

中村敦夫	参議院議員	三原 淳	経済評論家 株式評論家
原田和明	三和総合研究所特別顧問	石川 一洋	NHK解説委員
西澤宏繁	東京都民銀行頭取	元モスクワ支局長	
亀井静香	衆議院議員	山田 伸二	NHK解説主幹
山田伸二	NHK解説委員	中谷 元	元防衛庁長官 衆議院議員
武者陵司	ドイチエ証券チーフストラジト	金子一義	第一生命経済研究所 主任研究員
川崎真一郎	国務大臣	山口義行	立教大学教授
金子一義	第一生命経済研究所 主任研究員	山田伸二	NHK解説主幹
斎藤精一郎	千葉商科大学教授	斎藤精一郎	千葉商科大学教授
伊藤 達也	元 金融担当大臣	渡辺 喜美	元 経済産業省 経済産業政策局長
高木新二郎	㈱産業再生機構 産業再生委員長	山崎 淑行	みんなの党代表 衆議院議員
斎藤精一郎	千葉商科大学大学院教授	中谷 巍	NHK科学文化部 記者
(株)NTTデータ経営研究所所長	月尾 嘉男	一橋大学教授	渡辺 喜美
社会経済学者 エコノミスト	山田 伸二	ロバート・フェルドマン	みんなの党代表 衆議院議員
学校法人静岡理工科大学理事長	NHK解説主幹	月尾 嘉男	NHK科学文化部 記者
佐々木和男	熊野 英生	東京大学名譽教授	山崎 淑行
元 三菱商事㈱本部長	五十嵐 敬喜	一橋大学学長	中谷 巍
サウディ石油化学㈱ 前社長	&コンサルティング 執行役員	板垣 信幸	ロバート・フェルドマン



写真家 杉村 浩 制作

春はあけぼの

佐々木 誠 吾

ひともとの思ひをたくしさるさわの池のふもとに植ゑし花かな  
かぞふればいと限りなしさるさわの岸べにさきし水仙の花

ひさびさに宅に降る雪山かぜの吹き散らしなそ花のこなゆき

あかしたきことのありせばうちあけて恋ふる思ひのつのるひとゆゑ

我がたくに山ほどとぎすいつかきて梅さく頃となりにけるかな

わが庵に友たづねきて語らひのすぐる頃にそ浮かぶ月かけ

山ざくらさかりの時ゆすぐる身の家路わすれてとどまりにけり

講演会の主な講師  
(講演時役職)  
〔敬称略〕

山黒岡山山長梅鈴前牛野中岡加堺天河高糸小藤大安斎土本稻吉井岩福  
室田松本田富沢木川場坂沢村藤屋谷野木川汀原平井藤屋葉野深佐田  
莊祐新榮宗英三幸勝一節俊春信昭忠和太直洋二英利弘正三一秀俊凱赳  
男真郎助久郎男一雄彦如義夫寛一弘平郎夫得達芳謙郎清郎三彦大実夫  
N通通通大国東日外作中N慶作通科弁組日政大參科經本経日ソ富大  
H産產產藏本H應學織本學田本士大  
K省省省稅京務產工經治議濟濟本二  
企K義技學濟藏技技銀銀内  
解產生國官銀塾業解省術護研新評院術評評  
活業際府都省業解大究聞大研行行  
說業產政政房行序說學顧所社論議論社  
委審業策治審長知總顧長委教長所顧  
員議局局部議長所顧

通財産省伊金山龟西早島副山久岩斎目原和小七霍松鈴有大水森堀水藤井大  
子口井澤坂田島田保國藤良田田浜△見永木馬來谷江城井浦山  
担当達一義靜宏茂晴隆伸哲一浩和維ジ芳信淑朗武研忠武康昊  
當當官也義二香繁三雄彦二亘人郎一明俊人フ浩雄夫人郎治亘男彦雄之人

昭和經濟 27-3月号

昭和25年6月24日 第3種郵便物認可（毎月1回1日発行）  
昭和25年10月19日 日本国鉄道特別版承認雑誌第1797号

**Showa Economic Study Association**  
**企業家・経営者団体**

公益社団法人 **昭和経済会**  
事務局 〒104-0028 東京都中央区八重洲2-11-2  
TEL 6820-6000・3271-8846 FAX 3271-3104  
URL <http://www.showa-ec.or.jp/>  
e-mail [info@showa-ec.or.jp](mailto:info@showa-ec.or.jp)